『日本アジア研究』第 18 号（2021 年 3 月）

写真史料が伝えるベトナム反戦運動
――1968 年北九州反戦青年委員会弾薬輸送阻止闘争の記録――

市橋秀夫 *

本稿は、福岡の「青年労働者」の青年運動組織である社会主義青年同盟福岡地区本部が 1968 年に撮影し、集会や学習会などで巡回展示に活用した記録写真について、時代や地理的な文脈とともに紹介・解説するものである。そのうえで、社会運動や労働運動などの史料としての記録写真が持つ意味や、解釈上の問題、ヴィジュアル史料ならではの意義はどういった点に見出せるのかについて、若干のコメントをおこなう。

写真記録の主たる対象は、北九州市方面在住の社青同福岡の同盟員が中心となって結成された北九州反戦青年委員会が 1968 年に展開したベトナム反戦の非暴力直接行動である。中心となった行動は、北九州市の中ほどに位置した米軍山田弾薬庫への弾薬輸送阻止闘争である。ただし、写真記録には、北九州反戦青年員会が最初に取り組んだ北九州市「合理化反対闘争」が冒頭に配されているほか、RF-4C ファントムジェット偵察機が九州大学に墜落したあとの現場風景やその直後に板付基地撤去を求めて行なわれた「板付闘争」を記録した写真も含まれている。

日本におけるベトナム反戦運動史研究では、ベ平連や学生運動が展開した活動についてはそれなりの研究蓄積がある。ところが、全国各地で多数の青年労働者が参加した反戦青年委員会によるベトナム反戦運動については、基礎的な研究も皆無といってよく、したがってベトナム反戦運動の通史的研究でも内容ある言及はほとんどなされていない。その結果、地域ごとに大きく異なる方針を持ち各々独自活動を展開していたにもかかわらず、反日共系の学生活動家とともにヘルメットをかぶり角材を振り回す「過激派」という一律な通俗イメージを問い直す作業はなされていないままである。

本稿が取り上げる事例は、北九州におけるベトナム反戦運動のハイライトとなった米軍弾薬輸送阻止闘争が、市民でも学生でもなく、青年労働者が個人で加盟した地域の反戦青年委員会がイニシアティヴを取ったユニークな非暴力直接行動だったことを明らかにしている。日本におけるベトナム反戦運動史研究には、さらなる地域の事例研究の積み上げと、運動主体の多元的な掘り下げが必要である。

キーワード：ベトナム反戦運動，1968 年，北九州反戦青年委員会、社青同福岡地区本部、山田弾薬庫、米軍基地

---

* いちはし・ひでお，埼玉大学教授，歴史学
本稿は JSPS 科研費 17K04187「在日米軍基地におけるベトナム反戦運動についての研究」（研究代表者・木原滋哉）の助成を受けた研究成果の一部である。

＜目次＞

１．はじめに
1-1.「反戦青年委員会」とは？――「北九反戦」の位置づけ
1-2.「社会主義青年同盟」とは？――「社青同福岡」の独自性
1-3. 社青同福岡地本が撮影した記録写真
２．弾薬庫輸送阻止闘争の背景
2-1. 九州北部の米軍基地ネットワークと 1968 年
2-2. 米軍佐世保基地
2-3. 米軍板付基地
2-4. 米軍山田弾薬庫と門司港
３．社青同福岡が作成した移動展示用写真記録の史料
3-1. 北九州市合理化反対闘争
3-2. 第一次弾薬輸送阻止闘争　5 月 16 日～26 日
3-2-1. 北九州市門司区田野浦での米軍チャーター船エクスマウス号からの弾薬陸揚げ
3-2-2. 5 月 19 日
3-2-3. 全港湾関門支部による米軍物資荷揚げ拒否闘争
3-2-4. 5 月 26 日（日）「歩道デモ」規制を突破
3-3. 九州大学箱崎キャンパスのファントム機墜落現場
3-4. 第二次弾薬輸送阻止闘争
3-4-1. 6 月 11 日（火）
3-4-2. 6 月 16 日（日）板付基地撤去闘争
3-5. 第三次弾薬輸送阻止闘争　7 月 17 日～21 日
4. 山田弾薬庫のその後
5. 運動史研究と写真史料

１．はじめに

本稿は、福岡の「青年労働者」の青年運動組織である社会主義青年同盟福岡地区本部（以下、社青同福岡）が 1968 年に撮影し巡回展示に活用した記録写真について、時代や地理的文脈とともに紹介するものである。そのうえで、社会運動や労働運動などの史料としての記録写真が持つ意味や意義について、若干の考察を試みたい。

写真記録の主たる対象は、北九州市方面在住の社青同福岡同盟員が中心となって結成された北九州反戦青年委員会（以下、北九反戦）が、1968 年に展開したベトナム反戦の非暴力直接行動である。なかでも、福岡県北九州市にあった米空軍の山田弾薬庫への弾薬輸送阻止闘争が、一連の反戦抗議運動の焦点となっている。

日本におけるベトナム反戦運動史研究では、ベ平連や学生運動が展開した活動については研究がそれなりに蓄積されてきている。ところが、全国各地で多数の青年労働者が参加した反戦青年委員会によるベトナム反戦運動については、基礎的な研究が皆無でもあり、ベトナム反戦運動の通史的研究でも踏み込んだ言及がみられない[1]。さらには、反戦青年委員会とは、ヘルメットをかぶり角材で機動隊に殴りかかる「過激派」であると、一律に見なされたまま語られてきたきらいがある[2]。

---

[1] たとえば、油井大三郎『平和を我らに――越境するベトナム反戦の声』岩波書店、2019 年。

[2] たとえば、トーマス・R・H・ヘイブンズ『海の向こうの火事――ベトナム戦争と日

本稿は、北九州における米軍弾薬輸送阻止闘争が、青年労働者が結集する地域の反戦青年委員会がイニシアティヴを取って展開され、そのイニシアティヴのもとに福岡や北九州のベ平連および反日共系の学生活動家が参加した、ユニークな非暴力直接行動であったことを示すものであり、さらなる地域の事例研究の積み上げと、運動主体（アクター）の多元的な掘り下げが必要であることを示すものである。

1-1.「反戦青年委員会」とは？――「北九反戦」の位置づけ

反戦青年委員会とは、1965 年 8 月に結成された社会党・総評系の青年労働者を中心にした社会運動組織の名称で、発足時の正式名称を「ベトナム戦争反対・日韓条約批准阻止のための青年委員会」[3]といった。「反戦青年委員会」はその略称である。事務局を構成したのは社会党青少年局、そして総評青年部と社会主義青年同盟（以下、社青同）中央本部の３団体である [4]。65 年は、2 月に米軍によるベトナム北爆が始まり、秋には日韓条約の批准を控えていた。社共の対立や既成政党や労働組合の枠や指令に囚われない、個人の自発性を尊重した新しい共闘スタイルの大衆運動創出を模索して呼びかけられたのが反戦青年委員会である。クリエイティヴな闘争の形を作る、動員で動く運動ではなく参加者個々人の意志による運動を展開する、党派イデオロギーに拘泥しない共闘を追求する――「創意・自立・統一」が掲げられた [5]。

反戦青年委員会は、外形的には、全国反戦、都道府県反戦、市町村反戦、職場反戦／地域反戦の 4 レベルに区分された [6]。この区分に従えば、1968 年の再建時には、福岡県の場合には、福岡市を基盤にした福岡反戦と北九州市を基盤にした北九反戦という「市反戦」が主軸で、いずれも社青同福岡の同盟員がその中心的担い手であった [7]。北九反戦は、もともとは地域の官民の労働組合が参加するかたちで 1965 年に結成されていたが、日韓闘争後は休眠状態となっ

本 1965-1975』筑摩書房、1990 年。

[3] 月刊社会党編集部『日本社会党の三十年（3）』日本社会党中央本部機関紙局、1975 年、210 頁。

[4] 共産党は、60 年安保闘争時の統一戦線である「安保反対青年学生共闘会議（青学共闘）」の再開を主張して、反戦青年委員会には参加しなかった。そのため、事実上は社会党・総評系の青年学生運動という性格を持って発足した。共産党の反戦青年委員会に対する立場については、たとえば、日本共産党中央委員会出版局編『政治年鑑 1969 年版』日本共産党中央委員会出版局、1969 年、534-36 頁を参照のこと。

[5] 反戦青年委員会の結成から 68 年の佐世保闘争までの歴史については、高見圭司編著『反戦青年委員会』三一書房、1968 年の第 1 章「反戦青年委員会の歩み」を参照のこと。また、社青同福岡を含む「反戦派地本」についてふれた江藤正修（元埼玉反戦事務局長）が執筆した「1968 年論（8）反戦青年委員会の総括（上）」『先駆』845 号、2009 年 3 月および「1968 年論（9）反戦青年委員会の総括（下）」『先駆』847 号、2009 年 4 月（ウェブ掲載版、http://www014.upp.so-net.ne.jp/senku/09-3-68.html、2020 年 7 月 10 日アクセス）や、社会問題研究会編『増補改訂’70 年版　全学連各派――学生運動辞典』（双葉社、1969 年）の 239-44 頁「反戦青年委員会」も参照のこと。

[6] 高見圭司編著『反戦青年委員会』三一書房、1968 年、73 頁。

[7] 1965 年の全国反戦結成時には福岡にも県反戦を作ったが、社青同福岡が中心となって反戦を再編した時には、福岡県では県反戦は作らず、北九州市と福岡市が二大市町村反戦だったという。この点については、筑紫建彦氏にご教示いただいた。

ていた[8]。その反戦とは別に新たに個人加盟で再結成されたのが、本稿で取り上げる 1968 年 2 月以降の北九反戦である。

1-2.「社会主義青年同盟」とは？――「社青同福岡」の独自性

日本各地の反戦青年委員会運動に基盤を提供した社青同であるが、これは、1960 年 10 月に結成された社会党青年部が中心となった青年運動組織である。党に属さない独立した青年政治組織結成の必要は、戦後の社会党結党当時から認識され、社会主義青年同盟（以下、社青同）結成の青写真も、戦後の早い時期から描かれていた[9]。しかし、結成の具体的な議論が現実味を帯びたのは、1958 年 5 月の総選挙での「敗北」後、党の「機構改革」の議論が進められていく過程においてのことだった。社会党は「機構改革」の一環として社青同設立の方針を固め、青年部もそれに応じていった[10]。広範な青年大衆層に党の影響力を浸透させるために、また、共産党系の大衆青年組織である「民青」（民主青年政治同盟）の組織拡大に対する対抗策として、青年同盟の確立は急務だと考えられる中で結成されたのである[11]。日本社会が高度経済成長期に入り、大衆社会状況の出現とその政治への含意が議論されるようになっていた時期である[12]。選挙で伸び悩んでいた社会党は、若い新しい支持基盤の確保の道を模索していた。

福岡では、職場や大学に「班」が作られ、その上に「支部」があり、さらにその上に「地区本部」という構成で、班や支部の結成が先行した。社青同福岡地本が結成されたのは、安保条約自然成立直前の 1960 年 6 月 16 日であった。社青同福岡の特徴は、三井三池闘争の経験を持つ労働者と、新左翼の諸セクトからの独立性が極めて高い九州大学出身の若い活動家がともに参加した点にあるといえよう[13]。

---

[8] 筑紫建彦オーラル・ヒストリー、2016 年 2 月 23 日。

[9] 1946 年以来、社会党青年部では社会主義青年同盟の結成についての検討がなされ、1948 年には「第三回青年部全国大会において社会主義青年同盟の設立が決定された」とある（「社会主義青年同盟結成関係資料」1949 年、国会図書館・憲政資料室「浅沼稲次郎関係文書（その１）」、455）。

[10] 社会党幹部と青年部では、社青同結成の思惑には異なる点があったが、外部新組織の必要という点では一致することができた。この点については、社会主義協会の観点で編集されたものではあるが、小島恒久・田中慎一郎編『戦後社会主義運動の再編成』河出書房新社、1975 年、355 頁を参照。

[11]「機構改革に関する報告」昭和 34 年 9 月（日本社会党血統 20 周年記念事業実行委員会編『日本社会党 20 年の記録』日本社会党機関紙出版局、1965 年所収、212 頁）。

[12] 松下圭一が提起した大衆社会論と構造改革論との密接な関係を論じた、後房雄「大衆社会論・構造改革論から政策型思考へ――公共政策研究への松下圭一の道」『公共政策研究』17 巻、2017 年、6-23 頁を参照のこと。

[13] 社青同福岡の草創期については、とりあえず『社青同福岡地本二〇年史（前編）』日本社会主義青年同盟福岡地区本部 20 年史編集委員会、1979 年を参照のこと。九大でも、ハンガリー事件後になると共産党細胞の瓦解が進んだが、共産党から離れた学生活動家の少なからぬ部分が、新左翼系のセクトではなく、社会運動展開の基盤を福岡で一定程度確立していた社青同への合流の道を選んだ点が特徴的である。職業革命家ではなく、それぞれが一人の社会人として現場を持ちながらアクティヴとして活動を継続していく道が模索された。この点については、黒田光太郎と市橋秀夫が聞き手

社青同福岡は、1967 年 10 月・11 月の羽田闘争と 1968 年 1 月の佐世保闘争における三派全学連の「実力行動」に大いなる刺激を受けることとなる。とりわけ、佐世保闘争には社青同福岡の多くの同盟員が参加し、職場と学習に閉じこもりがちだったそれまでの自分たちの運動のあり方を反省する重要な契機となった。当時の社青同福岡の執行部は、羽田闘争と佐世保闘争から学ぶものとして四点を挙げている――（1）大衆の主体的な「実力闘争」の権利回復、（2）市民・労働大衆の反権力意識の発生と未組織状況、（3）闘争に参加した集団・組織間の「もたれあい」と思想・実践両面での指導部の不在、（4）「平和運動」から反権力意識を持つ「反戦闘争」への質的変化。そして、社青同福岡が今後の運動のために第一に提起した内容が、反戦青年委員会の再建であった。

> 「われわれは、今までの運動の総括と佐世保闘争の総括から、全同志に次の具体的闘争を提起する。
>
> 一つは、反戦青年委員会の再建である。もしくは反戦青年委員会という名称でなくても、青年の意志を反映し、自分の力を持って行動できる集団の形成である。
>
> これは、「日本の核武装、ベトナム侵略、帝固主義的な政治動向」を、われわれの破壊されていく生活に、さらに抑圧と横暴を加えるものとしてとらえていく闘いを、大衆一人ひとりの生活、反社会の意識をつかみながら組織していくものである。この組織は行動することを生命力とする。自らの意志を大胆に、しかも創造性をもつて敵権力にぶつける行動を絶えず内外に提起し、無力感を打ち払い、一つの反権力の部隊として、また自分たらの力を構築する部隊として意識化されねばならない。それは組織内部の行動参加者によって明らかにされるであろう。全体的なスローガンとしては「ベトナム人民断固支持、日本の核武装阻止」である。
>
> この組織は、個人加盟を原則としながらも、組織加盟を認め、組織加盟のなかで参加していく大衆から、その意識の自立性を引出していくものとする。」[14]

北九反戦は、こうした課題を提起した社青同福岡の北九州地区の同盟員によって結成された。結成をリードしたのは、九州大学を卒業して労働組合「全電通北福岡支部」の専従書記を 1966 年度から 69 年度途中まで務めた筑紫建彦

となった桂木健次オーラル・ヒストリー、2012 年 3 月 27 日で語られている。また、60 年安保以後に新しく入学して九大での運動を牽引した学生活動家には、高校時代に兄弟姉妹や友人関係から社青同とのつながりや社青同への親近感を持っていた者がいたことも示唆的である。いずれにせよ、福岡においては、三井三池をはじめとする炭鉱労働運動や炭鉱労働者の世界との関連を抜きにして左派の社会運動、学生運動、政治運動を語ることはできない状況があり、それが九大の学生運動をきわめて独自性の高いものにする要因となっていたと言えよう。

[14]『闘う若者』特別号 No, 72、1968 年 2 月 8 日、14 頁。『闘う若者』は、社青同福岡地区本部の機関誌である。なお、この貴重な機関誌史料は、北九反戦の主力メンバーでもあった木村敏彦氏が所蔵し、氏のご厚意によってお借りしたものである。

である[15]。これ以降、福岡市に拠点を置く社青同福岡とは深く連携・共闘しつつも、福岡市とは離れた北九州市での独自の反戦活動が、「完全な個人加盟方式」[16]とした北九反戦によって展開されていくことになる。

1968 年 2 月 21 日に北九州市で開かれた北九反戦の結成大会に参集したのは、「電電公社、国鉄、八幡製鉄、西鉄、市役所、中小企業などに働く青年労働者と北九州大学の学生」およそ 50 名だった[17]。門司、小倉、八幡、戸畑、若松の各地区に地区反戦を持ち、結成ほどない 5 月には 200 名以上のメンバーを擁していた[18]。西鉄問題、北九市合理化粉砕闘争、弾薬輸送阻止および山田弾薬庫撤去、板付基地撤去など、ベトナム反戦および地域の労働問題を中心に立て続けに激しい非暴力直接行動を起こしていった。

反戦派が中心だった社青同福岡解散後に、反戦派を批判して再建された社青同福岡が出した公式の社青同福岡地本史にも、反戦派が主導した 1968 年当時の社青同福岡の状況を次のように記されている。

> 「北九反戦青年委員会の再建を皮切りに、山田弾薬庫闘争、九大構内へのファントムジェット戦闘機の墜落を契機とした板付基地撤去阻止闘争を経る中で、福岡、筑豊、大牟田などで反戦青年委員会が再建されたり、職場反戦や地区反戦準備会が結成されていったのです。そして、エンプラ闘争以降、地本全体の運動は、北九州を中心に反戦青年委員会運動へと凝縮していきました。」[19]

北九反戦／社青同福岡が取り組んだ個々の実力行動については、後段の記録写真の解説で述べていくこととする。

1-3. 社青同福岡地本が撮影した記録写真

本稿掲載の記録写真史料の撮影は、北九反戦への参加者の多くが加入していた社青同福岡のメンバーであるアマチュア写真家がおこなった。撮影された写真は引き伸ばされ、どこでも簡単に写真展示がおこなえるよう、カードボード（硬質の厚紙段ボール）に直貼りされた。ベトナム反戦活動を訴える情宣（情報の提供と広報宣伝）活動に使用するためである。本史料をこんにちまで保管してきたのは、1967 年 9 月から 1971 年 7 月まで社青同福岡の専従として書記次長を務めた織田晋平である。

巡回写真展示用に作成されたすべてのカードボード写真が現存しているわけではない。本稿では、現存カードボード写真すべてをデジタル・スキャンして採録したが、欠番があるのはすでに紛失して所在が分からなくなっているものがあるためである。

本稿掲載の記録写真に撮影されている運動を含む北九反戦の活動や行動の

---

[15] 筑紫建彦オーラル・ヒストリー、2016 年 2 月 23 日; 『全電通北福岡支部二十年史』全国電気通信労働組合北福岡支部、1984 年、55 頁。
[16]『闘う若者』No, 74、1968 年 5 月 31 日、1 頁。
[17] 福岡労働者反戦闘争委員会編『反戦青年労働者』三一書房、1969 年、31-32 頁。
[18]『闘う若者』No, 74、1968 年 5 月 31 日、1 頁。
[19]『社青同福岡地本二〇年史（前編）』日本社会主義青年同盟福岡地区本部 20 年史編集委員会、1979 年、62-63 頁。

一部始終については、福岡労働者反戦闘争委員会編『反戦青年労働者』（三一書房、1969 年）にまとめられている。これは、運動の中心となった当事者みずからが、北九反戦の取り組みを軸にして執筆した同時代的史料としての性格を強く持つものである。また、1968 年から 50 周年を機に「1968 年」については多くのことが書かれ発表されているが、山田弾薬庫への弾薬搬入阻止闘争をはじめとする非暴力直接行動を展開した北九反戦の 1968 年については、研究論文はもとより、当時を回想あるいは回顧する新聞や雑誌の記事も、管見では存在しない。

福岡に限らず、1968 年から 50 周年ということで多くの著作物が出されていきているが、そのほとんどがいわゆる全共闘に代表される「学生運動」や、ベ平連に代表された「市民運動」の経験をめぐるもので占められている。多くの青年労働者が参加し、学生運動ともベ平連とも連携することのあった反戦労働者運動については、紹介や検討がいちじるしく不十分なままである。

写真記録ということでは、毎日新聞社が大型本「シリーズ 20 世紀の記憶」（全 20 巻）の第 1 回配本として 1998 年末に刊行した『1968 年』のなかで、「山田弾薬庫闘争（反戦）」のタイトルのもと 4 頁にわたり、計 19 枚の未発表も含む当時の報道写真がキャプションとともに掲載されている点が注目される [20]。写真を中心にまとめられた全 368 頁の大部の本ではあるが、うち 4 頁をも山田弾薬庫への輸送阻止闘争に費やしているのは、他の 1968 年関連本での扱いと比較すれば異例である。編集したのは、毎日新聞社系週刊誌の記者を経て『カメラ毎日』の編集長となり、写真評論家としての著作も多い故・西井一夫（1946-2001）である。20 世紀クロニクラーとしての西井が山田弾薬庫闘争をどのように評価していたのかは不明だが、注目される編集方針である。

また、インターネット上で公開されている報道写真のアーカイヴズとして「時事通信フォト」や「毎日新聞フォトバンク」があり、ここにも、山田弾薬庫の撤去や弾薬輸送阻止の闘争や板付基地撤去闘争に関連した写真が複数枚収録されていることが確認できる。

２．弾薬庫輸送阻止闘争の背景

写真史料の説明に入る前に、北九反戦に代表される福岡の反戦青年委員会の行動、とりわけ山田弾薬庫への弾薬庫輸送阻止闘争の記録写真理解のために必要な背景についてふれておく。

第一は、闘争を担った運動主体についてである。闘争主体となった北九反戦の結成の経緯やその母体である社青同福岡地本については本稿冒頭ですでにふれた。ここで山田弾薬庫への弾薬搬入阻止闘争に焦点を当ててあらためて確認すれば、運動の中心となったのは、「青年労働者」と呼ばれる 20 歳代、10 歳代の若い労働者だった。北九反戦も、当時の日本電信電話公社（以下、電電公社）の労働組合である全国電気通信労働組合（以下、全電通）の公務員労働者が活動の主軸となり、北九州地域の大小さまざまな労働組合に所属する社青同同盟員が多く参加していた。女性の労働者の参加もあったが、圧倒的多数が男

[20]『1968 年』毎日新聞社、1998 年。西井は編集長としてシリーズ全体を企画・統括し、20 世紀末のシリーズ完結（2000 年 12 月）後に退社、翌年食道がんで死去。

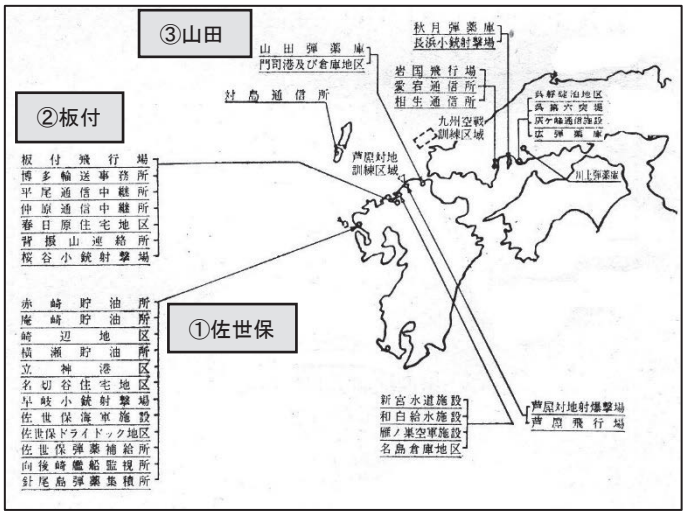
性の青年労働者であった。彼らは、職場での権利や利害のみならず、社会や政治について、そして自分たちの生き方がどうあるべきかについて仲間とともに問うた、語の率直な意味での「真面目な」青年労働者であった。

第二は、弾薬列車阻止闘争が取り組まれた 1968 年当時の九州北部における、主要米軍基地の動向である。在日米軍基地はいずれも米軍の対アジア戦略に位置付けられて配置されており、その空間的・地理的な理解は不可欠である。以下、九州北部における主要米軍基地とそのネットワークについて述べる。

2-1. 九州北部の米軍基地ネットワークと 1968 年

九州北部に存在する米軍基地は、ベトナム戦争時代の主要なものとしては、長崎県佐世保市の佐世保海軍基地、福岡県福岡市の板付空軍基地、そして福岡県北九州市の山田弾薬庫があった（**図 1.**）。九州の北部に位置する福岡県と長崎県は、朝鮮半島や中国大陸に近く、東南アジアへの距離も沖縄に次いで近い。

図 1. 北九州における主要米軍基地と中国地区関連米軍施設の配置



出典：防衛施設庁施設部施設企画課窪田稔「基地の問題点とその対策」(時事問題研究所編著『米軍基地　誰のためのものか』時事問題研究所、1968 年所収、185 頁より、筆者加工作成。)

とりわけ、第二次世界大戦後、米軍の極東アジアにおける前進基地戦略に位置付けられていた在日米軍基地として、佐世保市の佐世保海軍基地と福岡市の板付空軍基地は重要な存在だった。燃料をはじめ、板付などの九州北部の米軍基地で必要とされる各種軍需物資は、多くが佐世保港から荷揚げされて輸送された。また、山田弾薬庫は米空軍管轄の弾薬保管庫ということで、板付空軍基地の付属施設としての機能を果たしていた。九州北部のこの三つの基地はそれぞれ離れた距離に位置して独立した機能を果たしていたとはいえ、燃料や物資の補給などの面で相互の連携は不可欠なものだったのである。

1968 年は、この九州北部の米軍基地の歴史において重要な意味を持つ年となった[21]。1968 年の上半期には、1 月 22 日深夜にアメリカ合衆国の情報収集

[21] 1968 年の在日米軍基地問題については、1968 年に始まる日米政府間の米軍基地再編・統合交渉の過程を明らかにした川名晋史の論文「68 年基地問題と再編計画の始動」『近畿大学法学』61 巻 2・3 号、2013 年、263-299 頁がある。しかしながら、この

補助艦プエブロ号が北朝鮮領海で拿捕された事件[22]や、1 月 30 日に始まった北ベトナムによるテト攻勢の衝撃があり、極東や東南アジアでは緊張が急激に高まった。これに応じて日本及び米軍占領下の沖縄に存在する米軍基地を発進基地や補給基地にする形でのアメリカ合衆国のベトナム戦争への介入も深まりをみせ、沖縄を含む西日本全域での戦闘機や戦艦の発着および弾薬輸送も目に見えて増えるようになっていた――1 月 19 日の原子力潜水艦エンタープライズの佐世保入港、2 月 5 日の戦略爆撃戦闘機 B52 の沖縄・嘉手納基地への配備開始[23]、プエブロ号拿捕後の板付基地への各種偵察機の多数飛来[24]など。地域住民の関心や注視も強まり、米軍の活動の活発化にともなって発生する事故の犠牲になるのではないかという住民不安も全般的に高まっていたといえる。そうした中で、佐世保では米原潜からの放射能漏れ、板付ではファントムジェット偵察機の九州大学への墜落というきわめて重大な事故が起きたのである。

そもそも、ベトナム戦争に参戦する直接の当事者ではない日本におけるベトナム反戦運動の大義には、日本のベトナム戦争「加担」への反対ということがあった。在日米軍基地がベトナム戦争に直接的に関与しており、日本政府もそれを支持している。日本企業もまた、ベトナム戦争の特需に沸いている。日本国内外における米軍軍需物資の運搬に従事する日本人労働者も少なくない。在日米軍基地のある地域の雇用や経済がベトナム戦争の泥沼化に反比例して活気を帯びていく。このように、さまざまな形で日本がベトナム戦争に加担していることは戦争の加害者であるのではないかということが、当時の日本のベトナム反戦運動では問われていた。

米軍基地に関わって連続して起きた重大事故とそれに対する抗議と不安、ベトナム戦争に加担したくないという感情や信念――それらが補完し合って、市民、学生、労働者だけでなく、基地が所在する地域の住民も参加する、ベトナム反戦運動であると同時に米軍基地撤去運動でもある激しい闘争が、1968 年上半期という短期間のうちに九州北部の各地で続けざまに起きたのである。そして、この九州北部での米軍基地関連の重大事故や高まる反基地闘争が一つの重要な契機となって、米軍および米政府での検討が始まっていた日本の在日米軍基地全体の再編が、大きく加速されることになったのである[25]。

論文は 1968 年に高まった各地での基地撤去の闘争とそれに対する日本政府の対応がその後の米軍基地再編につながったという観点を提示する一方で、各基地闘争の具体的分析はなされていないままである。そのため、弾薬輸送阻止闘争についても闘争が展開した理由や闘争の性格についての記述はきわめて短く表層的であり、闘争が果たした役割や意義についても機能主義的な役割しか与えられていない憾みがある。山田弾薬庫に関する記述は、同論文、270-71 頁にある。

22 事件後、在日米軍基地は一斉にアラート（警戒体制）に入り、各基地からの戦闘機や戦艦の出入りが激しくなった。青島章介・信太忠二『基地闘争史』社会新報、1968 年、11-12 頁を参照のこと。

23『朝日新聞』東京版、1968 年 2 月 6 日朝刊。

24『福岡市史　第 9 巻　昭和編続編（一）』（福岡市役所、1990 年）、144 頁。

25 川名晋史「68 年基地問題と再編計画の始動」『近畿大学法学』61 巻 2・3 号、2013 年、263-99 頁。また、1968 年から 69 年にかけて在日米軍基地が直面している困難や課題については、九州大学への米軍機墜落事案を中心に取り上げて在日アメリカ大使館から本国国務省に宛てられた電報や郵便史料を訳出して収録した『「九大紛争」資

次に、それぞれの基地の概要や相互連関、また、弾薬輸送阻止闘争がたたかわれた 1968 年当時のそれぞれの基地の状況についてみていくが、まず、時系列順に、1968 年 1 月、原子力潜水艦エンタープライズの佐世保入港阻止闘争がたたかわれた長崎県佐世保市の佐世保基地からみていきたい。

2-2. 米軍佐世保基地

長崎県佐世保市の佐世保港は、米海軍第 7 艦隊の兵站支援基地（Logistic Support Base）とされ、油や弾薬の補給、修理、乗組員の休養などのために使用されていた。ベトナム戦争へのアメリカ合衆国の介入が深まるにつれ、佐世保港もあわただしさを増していった。1964 年 11 月 12 日には米原子力潜水艦シードラゴンが入港し、日本で初めての原潜寄港となった [26]。1965 年 2 月には米原潜シードラゴンが佐世保に再度入港、5 月には米原潜スヌーク号が入港、11 月にはふたたびシードラゴンが入港した。1965 年秋にはベトナム戦争に参加した空母の入港や、破損したジェット機を積んで南ベトナムのダナンから入港してくる LST（Landing Ship, Tank: 戦車揚陸艦）、タンカーなどの動きが頻繁にみられる様子が報道されている [27]。64 年のシードラゴン入港時にも強い懸念の声と大きな反対運動が起きた。福岡県立修猷館高校の定時制では「原潜反対、原水禁、ベトナム反戦」の署名活動を行った高校生及びそれを擁護した教員が処分され、高校生側が訴えて裁判となる事件まで起きたのである [28]。

しかし、佐世保への原潜寄港反対闘争といえば、こんにち最もよく記憶されているのはシードラゴン入港から 3 年経った 1968 年 1 月のエンタープライズ入港時の闘争であろう。1967 年 10 月、11 月の第一次、第二次羽田闘争に続き、いわゆる三派系全学連は佐世保闘争を第 3 の羽田闘争にするというスローガンのもとに準備を進めていた [29]。数日に及んだ彼らの実力行使の直接行動と、それに対する治安当局側の激しい弾圧と規制で全国的に大きな注目を集めた。とくに、警察や機動隊のあきらかに行き過ぎた暴力的弾圧行為が大きく報道され、佐世保市民のみならず国民の強い反発を招いた。後述するように、この佐世保闘争が直接的な契機となって生まれたといえるのが、数か月後に北九州で弾薬庫輸送阻止闘争を担うことになる北九反戦であり、その九州大学の大学院生や若手教職員、学部学生で 4 月 13 日に結成された九大反戦青年委員会（以

料集――年表・米国国立公文書館所蔵資料等』（科学研究費補助金基盤研究（c）代表・折田悦郎、第 2 年度（平成 27 年度）報告書、2016 年）が一次史料に語らせて明らかにしている。

[26]『読売新聞』東京本社版、1964 年 11 月 12 日夕刊。

[27]『朝日新聞』西部本社版、1965 年 10 月 14 日朝刊。

[28]『べ平連ニュース』26 号、1967 年、7 頁。

[29] 第一次羽田闘争およびそれが当時の大学生に与えたインパクトについては、10・8 山﨑博昭プロジェクト編『かつて 10・8 羽田闘争があった――山﨑博昭追悼 50 周年記念［寄稿篇］』合同出版、2017 年および同編『かつて 10・8 羽田闘争があった――山﨑博昭追悼 50 周年記念［記録資料篇］』合同出版、2017 年。佐世保闘争については、当時は新聞や週刊誌で大々的に報じられたものの、佐世保闘争それ自体に焦点を当てた研究は、一部ウェブ上に存在する回顧や回想以外に活字化されたものは存在していないと思われる。

下、九大反戦）だった[30]。

さらには 5 月 2 日に佐世保に入港していた米原子力潜水艦ソードフィッシュの近くで、海上保安庁が 6 日に高い異常放射能を測定して問題化した。米側は否定したものの、ソードフィッシュからの放射能漏れと専門家による調査団が判断し、日本政府は安全性確認されるまで寄港を控えてもらうなどと答弁し対応に追われた[31]。

2-3. 米軍板付基地

福岡県には、福岡市の中心部から 2 キロの位置の板付飛行場（457 万 3,000 平方メートル）[32]をはじめ、射爆場、通信基地、給水施設、連絡や輸送事務所、米軍家族住宅など各種の米軍施設が存在した。板付は、横田、三沢とならぶ日本の三大米空軍基地の一つであった。

板付基地は、米軍占領下、1950 年の朝鮮戦争勃発で第一線基地となり、F80、F86 などが連日出撃、西日本における最重点在日米軍基地と位置付けられた[33]。ファントム機なら 38 度線まで 30 分かからずに飛ぶことができたという[34]。ベトナム戦争への米軍の介入が強まった 1963 年には、水爆搭載能力のある F105 ジェット戦闘機 14 機が板付基地に配備されている[35]。朝鮮戦争が休戦となってからは、板付飛行場は後方支援の役割へと回るようになる。 1964 年 5 月、在日米空軍の再編成にともなってそれまで常駐していた F105 戦闘部隊が横田基地へ移ってからは、板付基地は「有事駐留基地」すなわち「予備基地」となった。

ところが、1965 年以降、台風避難、補給、訓練などの名目で米軍機の離着陸は頻繁化し[36]、1968 年 1 月のプエブロ号拿捕事件[37]で朝鮮半島の緊張が高まると、米軍の RF-4C ファントムジェット偵察機、EB-66 電子戦闘機などが多数駐留するようになった[38]。1968 年 4 月には、予備基地化以降使われていなか

---

[30] 九大反戦青年委員会の結成については、『毎日新聞』西日本版、1968 年 4 月 14 日朝刊を参照のこと。

[31]『朝日新聞』西部本社版、1968 年 5 月 17 日朝刊。

[32] 板付基地はそのほとんどが日本に返還され、福岡空港として民間利用されているが、今なおすべてが返還されているわけではない。『西日本新聞』ウェブ版、2018 年 5 月 14 日（2019 年 9 月 15 日更新: https://www.nishinippon.co.jp/item/n/416038/, 2020 年 7 月 10 日アクセス）を参照のこと。

[32]『朝日ジャーナル』1968 年 7 月 7 日号、14 頁

[33]『朝日ジャーナル』1968 年 7 月 7 日号、14 頁。

[34] 毎日新聞社編『安保と米軍基地』毎日新聞社、1969 年、80 頁。

[35]『朝日新聞』東京本社版、1963 年 5 月 12 日夕刊。

[36]『朝日新聞』西部本社版、1965 年 10 月 13 日朝刊。

[37] 1968 年 1 月 22 日深夜、米海軍の情報収集補助艦プエブロ号が北朝鮮領海で拿捕された事件で、在日米軍基地は一斉にアラート（警戒体制）に入り、各基地からの戦闘機や戦艦の出入りが激しくなされた。青島章介・信太忠二『基地闘争史』社会新報、1968 年、11-12 頁を参照のこと。

[38]『福岡市史　第 9 巻　昭和編続編（一）』福岡市役所、1990 年、144 頁。RF-4C は、海軍の艦上戦闘機として開発された F4 戦闘機をもとに改造された攻撃機能を持たない戦術偵察機（unarmed tactical reconnaissance aircraft）で、1964 年からアメリカ空軍が採用した。F4 系戦闘機および偵察機はいずれもベトナム戦争で広範囲に投入された

った基地北端のアラートエプロン（緊急駐機場）に、「突然迷彩をほどこしたF102 戦闘機三機と B57 爆撃機一機が降り、整備を始めた」といった事態もみられるようになった[39]。

また、板付基地の近郊には「芦屋対地射爆撃場」（福岡県遠賀郡岡垣町）があり、米空軍および海軍によって射爆演習場として使用されていた[40]。1965 年当時、この射爆場は、岩国を拠点とする米海軍第七艦隊所属の第一海兵航空師団と、日本の自衛隊第 82 航空隊および自衛隊第八航空師団 F86F 航空隊が主な使用者といわれ、北爆が開始された 1965 年春以降には誤射爆が増えたと報道されていた[41]。

この板付空港に着陸しようとしていたRF-4Cファントムジェット偵察機が、1968 年 6 月 2 日の夜遅く、九州大学箱崎キャンパスに建設中の大型電子計算センターに墜落して炎上した。日曜日の夜ということもあり、幸いにも一人も死傷者はださなかったものの、本稿掲載の写真記録（㊱番）にもあるように、100 メートルと離れていない場所にはコバルト 60 照射実験室やアイソトープ実験室の入る実験棟があった。この墜落を機に、福岡におけるベトナム反戦運動は、墜落事故の被害当事者となった九大の学生や教職員だけでなく、保守革新を問わず、広く福岡市民、福岡県民が参加するかたちでの板付基地撤去運動へと一気に変貌をとげていくことになったのである。

板付基地の撤去を求めた青年労働者のベトナム反戦運動は、墜落現場となった九州大学で結成された九大反戦と、板付基地をかかえた福岡市に地本事務所を構えていた社青同福岡が中心となって取り組んだ。加えて、北九州市を拠点として行動を展開した北九反戦も、6 月 16 日の板付基地撤去闘争に積極的に参加した（本稿の写真 ㊶～㊾）。

2-4. 米軍山田弾薬庫と門司港[42]

国鉄の小倉駅から 5 キロほどの距離の緑深い丘陵地に米軍山田弾薬庫はあった。現在、一部は陸上自衛隊山田訓練所となり、その他は「山田緑地」として北九州市の公立公園として整備されている。市街地に近接した、344 ヘクタールに及ぶ山と野原、池や渓流の自然を有し、「都市の楽園」とも呼ばれた空

（英語版 Wikipedia の McDonnell Douglas F-4 Phantom II 項目：https://en.wikipedia.org/wiki/McDonnell_Douglas_F-4_Phantom_II#Aerial_combat_in_the_Vietnam_War　2020 年 6 月 25 日アクセス）。EB-66 は、敵の防衛レーダーを捕捉するとともに不能化する機能を持つ軍用機で、1965 年にベトナム戦争に初めて投入された。戦闘機とともに編隊を組んでベトナム戦争終期まで北爆に従事（National Museum of the United States Air Force ウェブサイト： https://www.nationalmuseum.af.mil/Visit/Museum-Exhibits/Fact-Sheets/Display/Article/196013/blinding-the-enemy-eb-66-electronic-warfare-over-north-vietnam/ 2020 年 6 月 25 日アクセス）

[39]『朝日新聞』東京本社版、1968 年 4 月 5 日夕刊。

[40] 毎日新聞社編『安保と米軍基地』毎日新聞社、1969 年、資料 4 及び 8 頁。

[41]『朝日新聞』西部本社版、1965 年 10 月 15 日朝刊。

[42]「門司港」は、五市が合併して北九州市が 1963 年に発足したことにより、「小倉港」および「洞海港」とともに統合されて「北九州港」となった。「北九州港」は、対岸の山口県の「下関港」と合わせて「関門港」とも総称される。門司港の歴史については、神崎智子「門司港の『女沖仲士』の歴史」、林えいだい『女沖仲士たち』新評論、2018 年所収、149-84 頁を参照のこと。

間である[43]。福岡県東部の北九州市のほぼ中央に位置する。

もともとは、1940 年頃に旧日本陸軍が秘密裏に開設、地下式（横穴式）及び半地下式の弾薬庫 128 棟が分散配置されていた[44]。これを米軍が第二次世界大戦後に接収した。山田弾薬庫は、板付基地に補給する弾薬を保管するための空軍管理の弾薬貯蔵施設と位置付けられていたが、当時、在福岡米軍の弾薬輸送は、米軍の広弾薬庫（広島県呉市）から北九州市小倉区の山田弾薬庫へと車両、あるいは貨車を利用しておこなわれていたという[45]。トラック輸送による弾薬の運搬のほか、山田弾薬庫へは国鉄南小倉駅から分岐する専用引込み線路が敷かれ、弾薬庫敷地内には積み降ろし用の専用プラットフォームが複数設置されるなど、鉄路を使用しての弾薬の運搬も可能だったのである。

その山田弾薬庫への荷揚げ港を含む「門司港及び倉庫地区」（13,000 平方メートル）も米軍の管轄下に置かれていた。「門司港及び倉庫地区」は米陸軍と海軍が管理する港湾施設である。

図 2. 1968 年当時の北九市門司区田野浦の笠石岸壁

［笠石岸壁の北側にはその後埋め立てられた太刀浦港湾造成地域の範囲も記載されている。］

出典：『毎日新聞』西日本版、1968 年 4 月 21 日。

門司港といっても当時の米軍の港湾使用権は広範囲で、田野浦、門司第一岸壁、門司第二岸壁、日明（ひあがり）港の 4 つに及び[46]、このうち、田野浦笠石岸壁は米軍専用弾薬荷揚げ岸壁とされていた（**図 2.**）[47]。
田野浦で荷揚げされた弾薬はトラックに積み込まれ、小倉区の山田弾薬庫へと運び込まれた。1963 年までは陸揚げの方が多かったが、1964 年からは積み出しが増えたことが確認されている[48]。ベトナム戦争での弾薬使用頻度が増したことの表れである。

1968 年に入ると、佐世保や板付の米軍基地での動きがにわかに活発化したのを受け、北九州市でも、1968 年 4 月 14 日に事前通告無しに行なわれたトラ

---

43 北九州市史編さん委員会編『北九州市史　五市合併以後』北九州市、1983 年、965-6 頁。
44 北九州地区労働組合評議会編『北九地評 15 年史』北九州地区労働組合評議会、1981 年、330 頁。
45 1993　福岡県警察史編さん委員会『福岡警察史　昭和後編』福岡県警警察本部、1993 年、598 頁。
46『朝日新聞』西部本社版、1965 年 10 月 16 日朝刊。
47 笠石岸壁は、正確にはいわゆる田野浦岸壁（田野浦埠頭）のさらに東に位置したが、田野浦の笠石岸壁として知られていた。現在は埋め立てられ、その先端には太刀浦埠頭の太刀浦第 1 コンテナターミナルがある。埋め立て地の住所表示は「北九州市門司区太刀浦海岸」、その埋め立て地につながる手前の陸地の住所表示は「北九州市門司区大字田野浦」である。
48『朝日新聞』西部本社版、1965 年 10 月 16 日朝刊。

ック 7 台積載 62 トンの弾薬輸送がきっかけとなり、市街地を通過して山田弾薬庫を出入りする弾薬輸送の危険性について世論が喚起されるようになった[49]。

北九反戦による輸送阻止闘争への取り組みが組織決定されたのは、事前通告なしの弾薬輸送が行なわれた 4 月 14 日である。そして、弾薬輸送阻止を掲げた最初の集会とデモが持たれたのは、4 月 28 日であった。社青同福岡の機関誌には、これらに関して以下の記述がある。

> 「北九州では、四月十四日に北九全同盟員［＝社青同福岡所属の北九州同盟員］会議を開き、北九州市合理化粉砕闘争の総括をふまえ、山田弾薬庫撤去要求闘争を中心とする方針を確認し、四月二十八日には北九反戦は、北九ベ平連や日中友好協会正統本部、全学連などと共闘して、「ベトナム侵略戦争反対、山田弾薬庫撤去要求集会」を持つた。約三百名が結集し（北九反戦は百五十名）、小倉区本町公園から山田弾薬庫（小倉区山田町）まで約一時間、ジグザグデモを貫徹した。」[50]

北九反戦はその後 5 月 15 日には、「山田弾薬庫にベトナム行きの弾薬が輸送されてくるなら、実力闘争で阻止することを確認した」[51]。この日、北九反戦が弾薬輸送を「実力闘争で阻止することを確認した」点は重要である。北九反戦を主導した筑紫建彦は、次のように記憶している。

> 「……実はずっとベトナム反戦運動というのは 60 年代から続いてきたのに、目の前で、爆弾が運ばれていくことについて誰も手を出さなかった。一方で集会では、ベトナム人民との連帯とかさ、ベトナム戦争反対とか言って、スローガンはそうなってるのに、目の前に爆弾が運ばれていくことについては何も手を出さずにスローガンだけ、あるいはシュプレヒコールだけで見送っているというのは、これおかしいんじゃないかという議論をしたのね。それで、やっぱり連帯というからには、殺されないような手立てを身をもって示さないと、ベトナムの人たちも信頼はしてくれないだろうし、こちらも言葉だけに終わってしまってね、誠実でないということになる。だから、これをなんとかして止めなくてはならんということになったんですよ。」[52]

この時点で議論されたのは、門司で陸揚げされた弾薬を輸送するトラックが山田弾薬庫に向かうのを阻止することだった。トラック輸送の阻止ではなく、

---

[49] 最も早い新聞報道は 4 月 15 日である。『朝日新聞』西日本版、1968 年 4 月 15 日朝刊; 同東京版、1968 年 4 月 15 日朝刊; 『毎日新聞』西日本版、1968 年 4 月 15 日朝刊（織田晋平氏所蔵の弾薬輸送に関する新聞スクラップに所収）。

[50] 社青同福岡地本『闘う労働者』75 号、1968 年 6 月 5 日、12 頁。『1968 年』（毎日新聞社、1998 年）163 頁には、山田弾薬庫の正門入口前でデモをおこなう反戦青年委員会所属の労働者らを写した 1968 年 4 月 28 日付とされる報道写真が一葉掲載されている。

[51] 社青同福岡地本『闘う労働者』75 号、1968 年 6 月 5 日、12 頁。

[52] 筑紫建彦オーラル・ヒストリー、2016 年 2 月 23 日。

列車輸送の阻止の直接行動をおこなうことが決定されたのは、「第二次弾薬輸送阻止闘争」が始まる 6 月 11 日の前夜のことだった。以後、本稿掲載の記録写真史料が示しているように、北九反戦を中心にした山田弾薬庫撤去および弾薬輸送阻止闘争は 7 月 21 日まで続けられたのである。

3．社青同福岡が作成した移動展示用写真記録の史料

以下、移動展示用に作成された闘争写真記録を闘争ごとに節に分けて掲載した。そして、それぞれの節の最初には、個々の闘争に関する説明を、当時の文書史料から引用をまじえてできるだけ簡潔に示すようにした。また、個々の写真記録史料については、オリジナルのカードボードに記載された番号およびキャプションとともに、筆者による最小限の写真説明を［　］に入れて加えた。現存する写真記録史料はそのすべてを掲載した。

3-1．北九州市合理化反対闘争

2 月 21 日に結成された北九反戦が最初に取り組んだ実力行動が北九州合理化反対の闘争だった。ここで北九反戦が問題とした合理化とは、「市営の病院事業における二五八人の首切りをはじめとする市役所の大々的合理化」[53]のことであった。「大々的合理化」とは、市立病院給食関係の民間委託と現業労働者 258 名の分限免職、手数料・使用量の値上げなどである。3 月 11 日には社会党国会調査団が北九州市に派遣され、病院給食の民間委託の違法・不当が追及されている [54]。

市議会審議の最終日となった 3 月 21 日には反対する労働側が動員した 25,000 人が市議会の建物内および構内に強行採決阻止のために集まった。翌 22 日から 25 日まで占拠は続き、25 日の朝、警官隊 1,300 名が占拠者の排除に入った [55]。北九反戦による闘争参加の経緯は、以下、社青同福岡の当時の機関誌からの引用とおりであるが、社青同福岡の北九州地区における同盟会議の場で、北九反戦が主体となってこの闘争に取り組む決定がなされたことがわかる。

> 「北九州市における二百五十八人の首切りをはじめとする大々的な合理化が強行されつつある。この情勢に対し、三月十二日、北九全同盟会議を開催、北九州市における反戦青年委員会の決起を決定した。三月二十日から二十五日の合理化案北九市議会強行採決まで反戦青年委員会は学生とともに連日市議会にすわりこんだ。
>
> 四月一日、北九市立八幡病院を解雇された者たちの就労を助けるピケに支援にでかけた反戦青年委員会の仲間に達［ママ］して、官憲は不当にも弾圧を強行。反戦青年委員会の中心的担い手である地本執行委員吉田同志は不当にも逮捕された。吉田同志は五十四時間もの間留置されて取

---

[53] 福岡労働者反戦闘争委員会編『反戦青年労働者』三一書房、1969 年、33 頁。
[54] 日本社会党福岡県本部 35 年史編さん委員会編『日本社会党福岡県本部の 35 年』日本社会党福岡県本部、1983 年、285 頁。
[55] 北九州地区労働組合評議会編『北九地評 15 年史』北九州市区労働組合評議会、1981 年、285 頁。

調べられた。彼はその間、権力に対して限りない抵抗を続け五十四時間目に元気に出所、北九［反戦］の同志に迎えられた。」[56]

掲載の記録写真はいずれも、闘争の最終日となった 3 月 25 日に導入された機動隊との対峙場面を撮影したものとなっている。警官隊による排除のあと、市議会本会議で合理化案は可決、成立した。

①1968/03/25「北九州市合理化闘争　屈辱のトンネル」

［3 月 25 日には 1,300 人の警官隊が導入され、市議会本会議場の内外に座り込んだピケ隊を 1 時間半にわたってゴボウ抜きにした。そのなかで全日自労門司分会の女性労働者増田フミ子（大里高校現業労働者）が死亡する事件がきている[57]。ゴボウ抜きされた者は、機動隊が両側に並んで作った「トンネル」あるいは「ベルト」と呼ばれた通路を、ときに小突かれたり蹴られたりしながら歩かされて闘争現場から立ち去ることを強いられた。この写真では機動隊は 2 列の「トンネル」を作り、その中を労働者が手前に向かって歩いている。右側の列を歩いているのは女性労働者で、手前先頭の女性労働者は、笑っているのが分かる。またトンネルの外側には、鉢巻をした女性労働者がぎっしりと座り込み、さらにその外側にも敷地をはみ出るあたりまで女性および男性の労働者が立ち並び、敷地の境のコンクリート塀の上にも男性労働者が並んで座っている。］

---

[56] 『闘う若者』No, 73、1968 年 4 月 15 日、9-10 頁。

[57] 増田フミ子は警官隊に突き倒されて脳内出血となり、市立戸畑病院で意識不明のまま亡くなった。北九州地区労働組合評議会編『北九地評 15 年史』北九州市区労働組合評議会、1981 年、285-86、520 頁。福岡労働者反戦闘争委員会編『反戦青年労働者』三一書房、1969 年、40 頁。

②1968/03/25「北九州市合理化斗争　市議会を占拠した労働者に弾圧開始を通告する機動隊」

［警察の掲示板には「退去警告」と記され、以下の文言が読み取れる「ただ今の時刻は○時○分です。本日の○時○分までに北九州市議会議事堂敷地外に退去を警告する。ている。もし退去しないと不退去罪で検挙します。　昭和四十三年○月○日　戸畑警察署長」。写真の上方には、多数の見物人が立っているのがみえる。］

③1968/03/25「北九市合理化闘争　社会党議員団」

［最前列にスクラムを組んで座り込んでいたのが社会党市議団で、第二列には共産党市議団が座り込んでいたという。3 月 25 日 10 時 47 分、警官隊は社会党市議団から排除に取りかかった[58]。］

④1968/03/25「市議会正門前のすわりこみ」

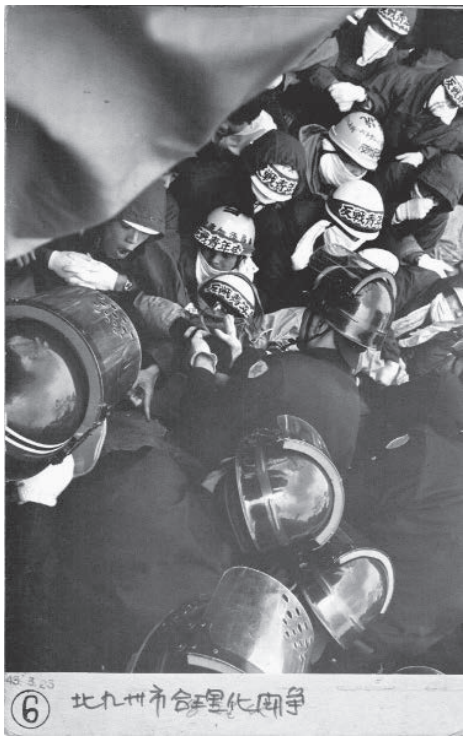
［座り込んでいる者たちはヘルメットの上に「反戦青年委」「自治労」「全逓」「反帝学評」などと染め抜かれた鉢巻をしている。］

[58] 北九州地区労働組合評議会編『北九地評 15 年史』北九州市区労働組合評議会、1981 年、285-86 頁。

⑤1968/03/25「機動隊の正門突破」

［ゴボウ抜きにされている社青同系の一団の外側には、年配の男女の現業労働者が多数座り込んでいることが分かる。］

⑥1968/03/25「北九州市合理化闘争」



［機動隊のゴボウ抜きに抵抗する「反戦青年委」のメンバー］

⑧1968/03/25「ゴボ［ママ］抜きされ、機動隊のベルトで.....（北九市合理化）」

［「ベルト」の外側手前には、社会党議員団の腕章を付けた人物が数名立っている。］

3-2. 第一次弾薬輸送阻止闘争　5 月 16 日～26 日

ここで見ていくのは、北九反戦が 4 月 28 日以降に主導し、数次に分かれて取り組まれた弾薬輸送阻止関連の行動である。この弾薬輸送阻止行動こそが、北九反戦に所属する青年労働者が独自に展開した 1968 年のベトナム反戦運動の核心を形成するものであり、本稿掲載の記録写真史料でも中心的位置を占めているテーマである。北九反戦の弾薬輸送阻止の本格的な実力行動は 5 月 16 日に始まり、途中に九州大学への米軍ファントム機墜落の事件とそれに続く板付基地撤去要求運動への参加を挟みながら、7 月 21 日まで続けられた [59]。本稿の記録写真史料も同日で終了している。

第 2 節（2-4.）の山田弾薬庫についての背景説明においても言及したが、「北九州市合理化粉砕闘争」を総括した 4 月 14 日、北九反戦は次の闘争の主眼を「山田弾薬庫撤去要求闘争」とする方針を確認した。4 月 28 日には「北九べ

[59] 北九反戦が参加した弾薬輸送阻止闘争は、8 月以降にも存在する。たとえば、10 月 22 日の笠石岸壁での弾薬荷揚げ拒否、輸送阻止座り込み闘争にも反戦青年委員会のメンバーが参加していたことが、本稿掲載の史料とは別に残されている記録写真史料（織田晋平所蔵）からも分かる。しかし、北九反戦も社青同福岡も、組織としては、8 月以降は裁判闘争に注力し、街頭での実力闘争に指導的立場で参加することはなかったといえる。

平連や日中友好協会正統本部、全学連などと共闘して」集会を開催、300 名で山田弾薬庫までの 1 時間にわたるデモを実施している。そして、「山田弾薬庫にベトナム行きの弾薬が輸送されてくるなら、実力闘争で阻止することを確認した」のが 5 月 15 日、米軍がチャーターした弾薬輸送船エクスマウス号が北九州市の門司区田野浦に入港したのはその翌日の 5 月 16 日だった。

北九反戦は、5 月 16 日から 26 日までの 5 月後半の一連の行動を「第一次弾薬輸送阻止闘争」と名付けた。ただし、すでに言及したが、この段階で考えられていた輸送阻止とは、トラックによる弾薬輸送の阻止であり、弾薬輸送列車を止めることではなかった。

3-2-1. 北九州市門司区田野浦での米軍チャーター船エクスマウス号からの弾薬陸揚げ

エクスマウス号は、韓国の釜山港から弾薬 3,500 トンを積んで入港した。弾薬は、米軍専用の田野浦笠石岸壁から陸揚げされ、トラックで山田弾薬庫へと輸送されることになっていた。1968 年、笠石岸壁の使用のうち最初の 3 回は積み出しであったという。5 月の田野浦での弾薬荷役が、同年初めての陸揚げ作業だった [60]。本稿の写真記録には、このエクスマウス号からの一連の弾薬荷揚げ作業と山田弾薬庫へと車両輸送するトラックの様子が撮影されている（写真⑨～⑲）。後述するように、この陸揚げは 21 日以降阻止されることになる。

北九反戦は、5 月 16 日について次のような記録を残している。

> 「五月十六日、米軍は門司区田野浦岸壁にエクスマウス号横づけ、三千五百トンという今までに例のない弾薬をトラックで山田弾薬庫へ運び出した。
>
> さっそく北九反戦青年委は、べ平連や日中友好協会、北九大の学生などに呼びかけ実力阻止の行動を起した。十八日には、これら百数十名が小倉市内をジグザグデモなどで行進し、国鉄小倉駅前で市民との討論集会を行なった。」[61]

なお、本記録写真史料にはないが、山田弾薬庫に到着して正門入口付近で駐車している弾薬輸送トラックの前に座り込む学生を写した 5 月 17 日付報道写真が別途存在している。このときの参加者は 50 名、北九州市立大学（以下、北九大）の学生が中心で、警官隊のゴボウ抜きで排除されたことが報道されている [62]。社青同福岡の機関誌『闘う若者』に言及がないことからも、このときの座り込みは学生主体であり、北九反戦は参加していなかったと思われる。

---

[60]『毎日新聞』西日本本社版、1968 年 5 月 16 日夕刊。

[61]『闘う若者』No, 75、1968 年 6 月 5 日、12 頁。

[62] 座り込みの写真は『1968 年』（毎日新聞社、1998 年）163 頁に、ゴボウ抜きにされている写真と記事は『朝日新聞』西日本版、1968 年 5 月 18 日朝刊に掲載されている。

⑨1968/05/16「三千五百トンの弾薬を積［ん］だエクスマウス号」

［米軍のチャーター船で、釜山港を出港して門司港に到着、沖合に停泊した。この「本船」に「艀」と呼ばれる小船が横付けされているのが分かる。「沖仲士」と呼ばれる労働者が本船から艀へと弾薬を挙げ下ろしし、岸壁とのあいだを行き来して運ぶ。］

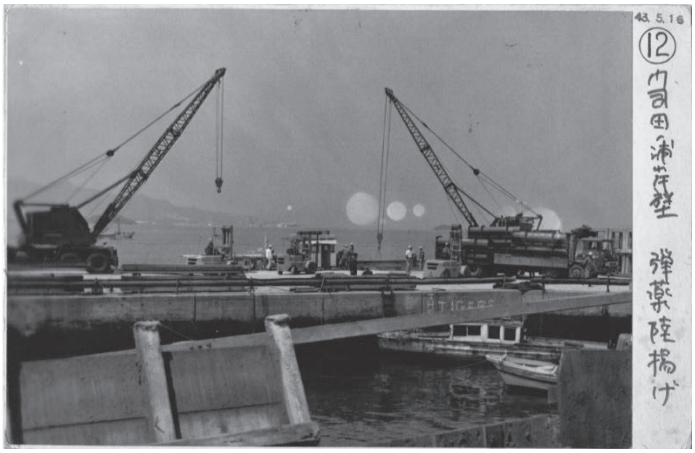
⑩1968/05/16「田ノ浦岸壁」

［田野浦
笠石岸壁］

⑪1968/05/16「ヤンキー」

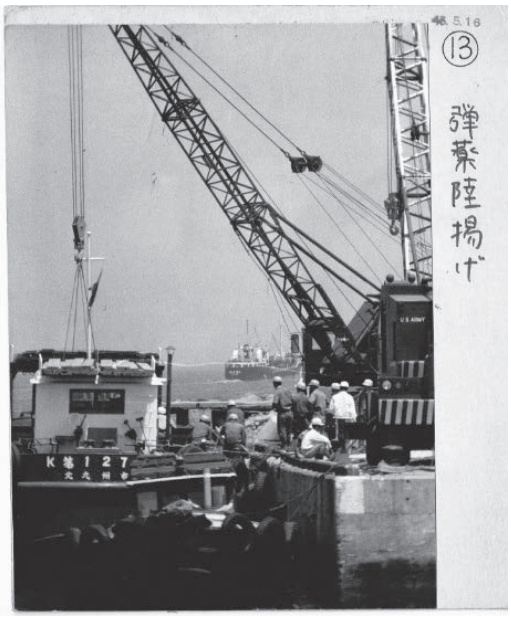
［胸に U.S. AIRFORCE の文字。「ヤンキー」のキャプションにはいかなる思いが込められているのか。］

⑫1968/05/16「門司田ノ浦岸壁　弾薬陸揚げ」



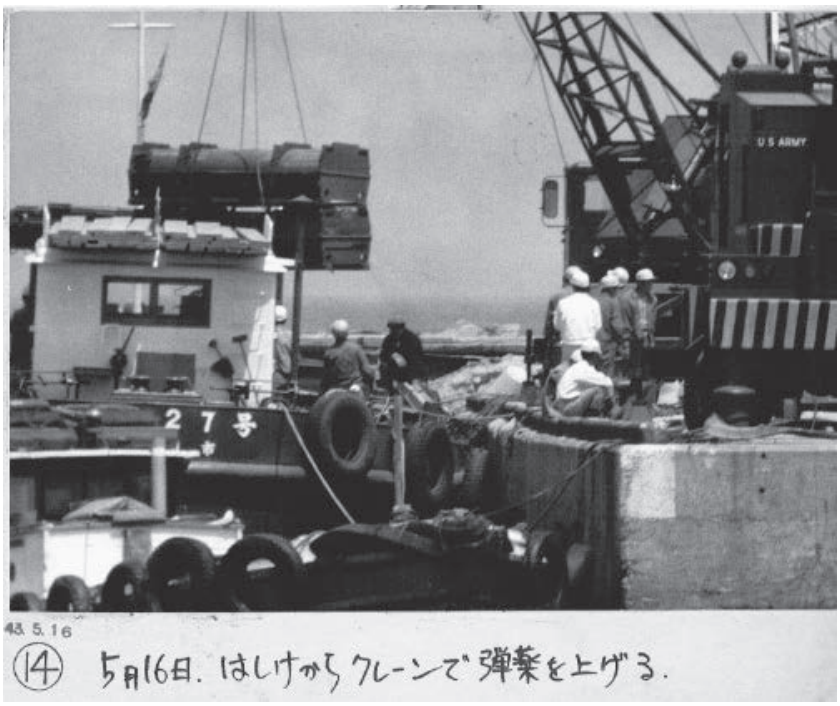
［田野浦笠石岸壁。艀（はしけ）からトラックへと弾薬の陸揚げ作業が行われていることが写真右側で分かる。］

⑬ 1968/05/16「弾薬陸揚げ」



［弾薬自身は、この写真では建物の陰に隠れてまだ姿を現していない。］

⑭1968/05/16　　「はしけからクレーンで弾薬を上げる



［建物の背後から引き揚げられているのが弾薬。］

⑰1968/05/16「弾薬輸送は日通の下請けの零細運送会社が行なっている」

［艀から引き揚げられた弾薬はそのまま輸送トラックに積み込まれている。］

⑱1968/05/16「弾薬輸送トラック」

⑲ 1968/05/16「ベトナム人民をぶち殺す　弾薬が ㊋.....」

［火薬を積載していることを示す ㊋のマークを付けて輸送トラックは弾薬庫に向かった。］

3-2-2. 5 月 19 日

5 月 19 日は、米軍弾薬輸送阻止のため、北九反戦委、北九州大学、九州大学の学生が午前 9 時、国鉄門司港駅前広場に結集し、百数十人のデモと集会を開いた。5 月 11 日に発足したばかりの福岡ベ平連（正式名称「＜ベトナムに平和を！＞福岡市民連合」）も、このデモと集会に参加した。福岡ベ平連最初の街頭行動である[63]。門司港駅前のデモの際に２名が逮捕されている。社青同福岡の機関誌には、以下の記述がある。

> 「翌十九日、北九反戦、北九大の学生など約百人は、門司港駅前で集会、その後うず巻デモなどで”輸送反対”の行動を起した。これに対して機動隊は徹底して弾圧し地本執行委員の泉同志と小倉支部の筑紫同志を逮捕した。その後バスで田ノ浦岸壁に行き、抗議。ふたたび門司署玄関で二人の釈放を要求してジグザグデモをした。」[64]

> 「十九日、門司港駅前で集会、うず巻デモを行なった。北九反戦二名逮捕―起訴される。そのうち一名、泉同志（福岡地本執行委員）は、谷北九州市長によって無給休職にされる。」[65]

㉒1968/05/19「5.19. 門司港駅前デモ（弾薬トラック輸送阻止）」

［腕をつかまれた青年のヘルメットには「反戦青年委」の文字の鉢巻。］

3-2-3. 全港湾関門支部による米軍物資荷揚げ拒否闘争

本稿掲載の写真記録には含まれていないが、翌 5 月 21 日には弾薬輸送阻止闘争史としても労働組合運動史としても重要なストライキ闘争が起こった。山田弾薬庫への弾薬輸送が実際に阻止されることになったのである。荷揚げ作業がすでに始まっていた 5 月 20 日、笠石岸壁で米軍の荷役作業を引き受ける労働者を組織していた全港湾の関門支部が、港湾会社で構成される関門港湾協会と海上荷役を請負っていた伸栄運輸に対し「アメリカ軍弾薬の安全性が保証されるまで、組合員に危険な作業はさせられない」として、21 日からの荷役を一切拒否する荷揚げ拒否闘争に打って出た。これにより、1,470 人の全港湾加盟

---

[63] 西依宏『ベ平連とは　福岡ベ平連の前進のために』＜ベトナムに平和を！＞福岡市民連合、1968 年 7 月 1 日、12 頁。
[64]『闘う若者』no. 75, 1968 年 6 月 5 日、12 頁。
[65]『闘う若者』no. 78, 1968 年 9 月 20 日、1 頁。

労働者がストライキに入った[66]。その結果、23 日に米軍は陸揚げ中止を発表、3 分の 2 の弾薬を荷揚げできずに積載したまま、24 日、広島県の呉港へと出港したのである[67]。この労働組合全港湾関門支部の拒否闘争は、北九反戦と連携した上での行動ではなく[68]、全港湾関門支部独自に行なわれた行動であった点に注目したい。

全港湾は、ベトナム反戦の意志表示を早い時期から明確に表すと同時に実効力ある行動をとった日本の労働組合であった。田野浦を管轄する全日本港湾労働組合（以下、全港湾）関門支部は、その先頭に立っていた支部である。たとえば、1965 年 2 月のアメリカ合衆国による北ベトナムへの爆撃開始後、関門支部は、6 月の全港湾中央闘争委員会による米軍の南ベトナム向け軍需物資荷役拒否決定を待たずに、4 月 30 日、5 月 1 日以降のベトナム向け武器、弾薬などすべての軍需物資の荷役作業については一切拒否する旨を関門港湾協会に通告した[69]。

前述した点だが、1968 年になって全港湾関門支部が荷揚げ拒否という実力闘争に乗り出したのは、4 月中旬以降、北九州市で弾薬輸送の危険に対する懸念が広く喚起されたからである。また、これもすでに言及したが、5 月 2 日に佐世保に入港していた米原子力潜水艦ソードフィッシュの放射能漏れ事故も、弾薬輸送への懸念をさらに増大させることになっていた。笠石岸壁周辺の住民のあいだでは約 200 名で「田野浦平和を守る会」が結成され、弾薬輸送反対の署名活動もなされた[70]。

米軍が荷揚げを諦めた 5 月 24 日には、北九州市議会が全会一致で山田弾薬庫の撤去と弾薬輸送の中止を求める決議をおこなっている。ただし、このときの保守系市長谷伍平は安全な輸送を求めただけで、弾薬輸送を拒否する意思はなかったようである[71]。なお、山田弾薬庫の撤去要求は、社会党が支持した吉田法晴前が 1963 年の 5 市合併後第一回目となる北九州市長候補に立候補した時にすでに掲げられてはいた[72]。吉田市長当選後の北九州市議会も、「危険で都市開発に支障がある」との理由で満場一致で山田弾薬庫の撤去を決議し、使われることがなくなっていた国鉄の引込み線の撤去の請願も採択していた[73]。しかし、その時点での撤去要求は、ベトナム戦争との関連ではなく、危険であ

---

66 北九州地区労働組合評議会『北九地評 15 年史』北九州地区労働組合評議会、1981 年、331 頁。

67 全日本港湾労働組合『全港湾運動史（第一巻）』労働旬報社、1972 年、338-39 頁。

68 筑紫建彦オーラル・ヒストリー、2016 年 2 月 23 日。

69 全日本港湾労働組合『全港湾運動史（第一巻）』労働旬報社、1972 年、335-37 頁。ほかに石川県の七尾支部や富山県の伏木支部でもベトナム向け軍需用木材の積み出しの荷役作業を拒否していた。

70『朝日新聞』西部版（北九州版）、1968 年 5 月 26 日朝刊。

71『毎日新聞』西日本版、1968 年 5 月 25 日朝刊（織田晋平所蔵の弾薬輸送に関する新聞スクラップ所収）。

72 北九州地区労働組合評議会『北九地評 15 年史』北九州地区労働組合評議会、1981 年、331 頁。

73『毎日新聞』西日本版、1968 年 4 月 15 日朝刊（織田晋平氏所蔵の弾薬輸送に関する新聞スクラップ所収）。福岡県労働組合評議会編『福岡県評二十年史』福岡県労働組合評議会、1976 年、783 頁も参照のこと。

ると同時に高度経済成長下の都市開発にとっての障害物という観点からの撤去要求だった。

3-2-4. 5 月 26 日（日）「歩道デモ」規制を突破

日曜日の 5 月 26 日には、エクスマウス号の弾薬荷揚げ阻止が現実となった直後という高揚感もあったと思われるが、デモを歩道に限定しようとする警察の規制を突破することになる大規模な反戦デモが小倉市内の目抜き通りで実行された。各地区の反戦青年委が結集したほかに、三派全学連、北九大や福岡のベ平連、日中友好協会（正統派）からあわせて 500 名が参加した。デモ隊は、出発点の小倉駅前からジグザグデモで臨んだ。デモは終始北九反戦が主導した。

> 「五月二十六日午後、「米軍弾薬庫撤去、弾薬輸送反対、ベトナム戦争反対」の集会を北九反戦青年委の主催で開催。北九州市の各地区反戦、直方、田川、嘉飯、福岡、久留米、京築の反戦青年委や青年の仲間が同盟の指導のもとに集まり、九大、北九大、西南大などの学生（全学連三派と革マル、ベ平連など）、日中友好協会を加えて五百名余が小倉駅前で集会、デモに移った。小倉駅前からジグザグデモで出発したが、警察はタクシーを全力しっ走でデモ隊に突っ込ませたり、三萩野交差点でデモ隊を歩道にあげようとし、自動車を押しつけようとした。彼らはデモ隊に傷を負わせることを目的とした弾圧の方法を一貫してとり、重傷者一名、ケガ人数十名が出た。またこの時、行橋の仲間木村君が逮捕された。
>
> デモ隊はその後も車道デモを貫徹し、市民の声援をあびながら山田弾薬庫前に到着。弾薬庫前ですわりこみ集会をしたあと、小倉署までデモで引き返し、木村君の釈放要求をして抗議した。この時も機動隊は高圧的な態度でのぞみ、負傷者が出た。
>
> 八時過ぎに解散したが、この日も、反戦青年委員会のリードのもとに全学連各分派、日中やベ平連の他団体は一致した行動をとった。」[74]

㉕1968/05/26「小倉三萩野交差点を行く北九州反戦青年委の部隊」

[74]『闘う若者』No, 75、1968 年 6 月 5 日、12-13 頁。

㉖1968/05/26「三萩野交差点　全港湾労組のストライキによって、弾薬陸上げを中止したエクスマウス号は 23 日出航した　5 月 26 日、福岡県青年抗議行動　小倉に 500 名の反戦青年委、全学連、ベ平連、日中正統が集結した。」

［三萩野交差点は、小倉駅からも近く、北九州市の道路交通の要所のひとつである。「革マル」の文字の見えるヘルメットや「革マル九大支部」の旗、「北九大ベ平連」、「日中友好協会（正統派）福岡支部」、「日中友好協会（正統派）八幡支部」といった各派の旗も写っている。］

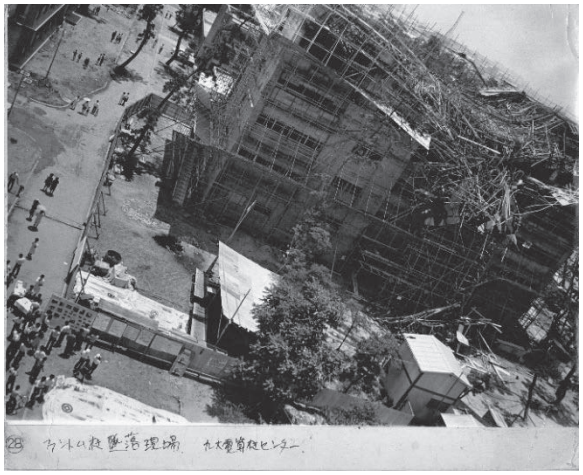
㉗ 1968/05/26「山田弾薬庫ゲート前（広さ 340 万㎡，弾薬貯蔵量不明）」

［「社青同」の旗のほか、「八幡地区反戦青年委員会」「小倉地区反戦青年委員会」などの地区反戦の旗が見える。］

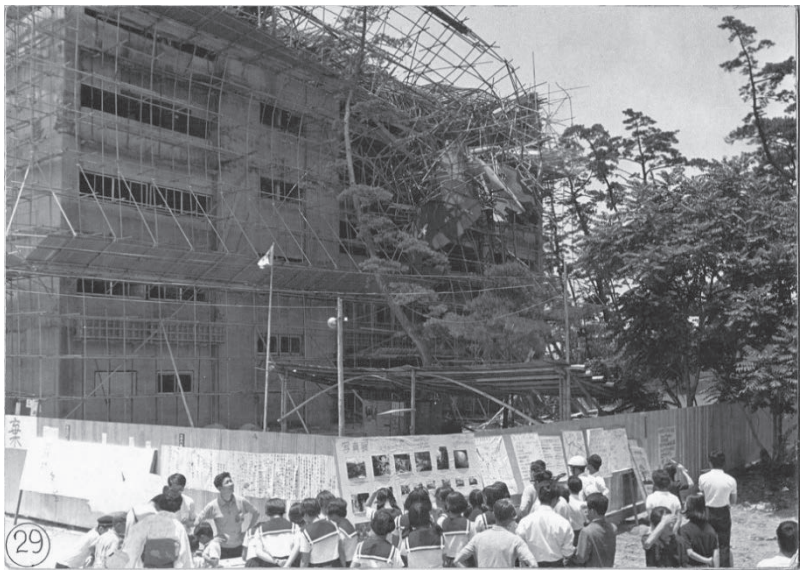
3-3. 九州大学箱崎キャンパスのファントム機墜落現場

ファントム機が墜落した 6 月 2 日以降に撮影された墜落現場の写真群。墜落の衝撃と異様さを日常のキャンパス風景との対比で訴えようとしたと思われる写真群。機体が突き刺さってゆがんだ鉄骨も生々しい建設中の電算機センターと、それを見学あるいは見物に来ている福岡市民、墜落現場近くのグランドで体育の授業をしていると思われる学生の光景が、コントラストをもって記録されている。墜落現場から 50 メートルしか離れていない場所にあったアイソトープ実験室も撮影されている。写真㉞、㊱は現存せず。

㉘ 日付なし「ファントム機墜落現場　九大電算機センター」



㉙ 日付なし、キャプションなし



［先生に引率されたと思われる中学生か高校生の一団が墜落現場の見学に来ている。建設中の電算機センターを取り囲むトタン塀には多数の張り紙やタテカン］

㉚ 日付なし「F4C-ファントム機を見に来る市民たち」

［未就学児や小学生を連れて見学に来ている二組と思われる家族。右側の小学生らしき子ども 2 名と、左側の未就学児らしき子ども 1 名は、は墜落機を見て物思いにふけっているようにみえる。］

㉛日付なし「F4C-ファントムの尾翼」

［トタン壁には、「危険ですから立入らぬ様お願いします。　銭高組」と「ジェット機見たらさ一行こう。採鉱科の展示」の張り紙。銭高組は、電算機センターの建設業者］

㉜ 日付なし「メチャメチャにつぶれた電子計算機センターの工場現場　機体にセメント車がへばりついている」

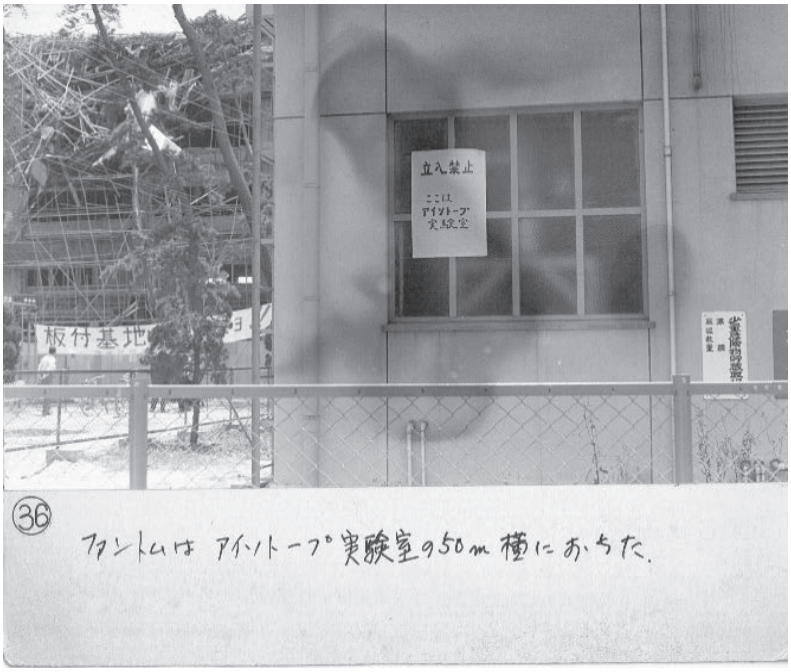
㉝日付なし「九大　電算機センター」

［機体の胴体部分は丸焦げだが、
尾翼付近は焼けずに破損している。］

㉟日付なし「ファントム機」

［この写真にも、熱で溶けて機体にへばりついているセメント車がはっきりと写っている。］

㊱日付なし「ファントムはアイソトープ実験室の 50m横におちた」



［「立入禁止　ここはアイソトープ実験室」の表示が貼られている。墜落翌日 1968 年 6 月 3 日朝刊の『朝日新聞』西部版の第一面では次のように報道している。「……現場近くには放射性物質を扱うコバルト 60 照射実験室やアイソトープ実験室などがあった。実験室の話では、実験室には四千キューリーに相当する放射能が入っているので、もしこれらの実験室に墜落していたら、一・三*四方は放射能におかされる危険があり、住民たちは立ち退かねばならなかっただろうといっている。」］

㊲日付なし「我々は平和な社会に生きているのか？」

［体育の授業だろうか、女子学生がバレーボールをしている。］

3-4. 第二次弾薬輸送阻止闘争

第二次弾薬輸送阻止闘争とは、北九反戦が弾薬輸送列車を 10 時間以上にわたって足止めした、6 月 11 日（火）のすわり込みによる非暴力直接行動のことである。このときの機関車運転士との交渉におけるやりとりが、北九反戦の参加者たちに、自分たちを含む日本人のベトナム戦争への加担のあり方について深い省察と認識を迫る契機となった [75]。

3-4-1. 6 月 11 日（火）

この日、北九反戦を主力とした福岡県下の反戦青年委員会の青年労働者（門司の動力車労組の反戦青年委も参加）、北九州大学および九州大学の学生、北九州と福岡双方の地区のベ平連、それに社会党北九州市会議員団と日中友好正統本部のグループ総支部の 50 人が加わった総勢およそ 200～250 名が、午前 6 時に南小倉駅に近い公園に集結した。前日の 6 月 10 日、国鉄労組の関係者から北九州市の社会党に「明朝、貨物列車で米軍弾薬が山田弾薬庫に搬入される」との情報があり、社会党は北九反戦には伝えず、南小倉駅近くの公園で抗議集会を開く方針だった。ところが、この情報を入手した北九反戦は、文字通りの「輸送阻止」を行なう決定をしたのである。

ただし、このとき北九反戦は、5 月に門司港で陸揚げできずに広島に運ばれていた弾薬が鉄道で輸送されてくると受け止めていた。この弾薬が、実際には、安保条約にもとづき東京の立川基地から輸送されてきた約 10 トンの「米軍ジェットエンジン始動用火薬」だと判明したのは、後日のことだという [76]。

---

[75] この点については、福岡労働者反戦闘争委員会編『反戦青年労働者』三一書房、1969 年、60-74 頁の第 1 章第 5 節「5. 抑圧されるものが抑圧する」に詳しい。

[76] 筑紫建彦オーラル・ヒストリー、2016 年 2 月 23 日。筑紫建彦から市橋秀夫への書

この日の報告は、次のように続いている。

> 「一九六七年の羽田闘争以来、学生による激しい実力闘争は続いている。しかし、ベトナム戦争に使われる兵器を、直接からだで阻止する闘争、しかも、その主力が青年労働者である闘争、青年労働者と学生がまったく同じ部隊で同じ行動をとる闘争、このような意義をはじめてこの弾薬輸送列車実力阻止の闘争が持ち、それが、新宿の米軍用タンク車阻止闘争など全国的に大きな波紋を投げかけていくとは、公園に集まった者のだれが気づいていただろうか。だが、情報を聞き、朝六時から思い思いのヘルメットをかぶって集まった青年・学生は、きょうの列車は絶対実力で阻止しなければ、と決意を固めていた。」[77]

午前 7 時 9 分、南小倉駅 3 番線に入って来た貨物列車が、そのまま山田弾薬庫への引込み線へと向かおうとしていたときである。そのときの様子は、映像記録でもあるかのような確かさでもって以下のように伝えられている。

> 「そのとき、二〇〇人の色とりどりのヘルメットをつけたデモ隊が、南小倉駅構内へと流れこんでいく。デモ隊は「弾薬輸送阻止！」と叫びながら、線路へ降りてジグザグデモをはじめる。デモはバク進してくる列車に向かっていく。機関車は真黒な煙を吐き、すさまじい汽笛を鳴らす。真白な蒸気が線路を這い、列車は急停車をする。「あぶないぞ！　さがれ！　さがれ！」動力車労組の腕章をつけた労働者が叫ぶ。デモ隊は、二〇～三〇メートルさがってそのままレールのうえにすわりこむ。巨大な機関車はデモ隊のすぐ前まで迫ってきて「キキー」ととまる。「弾薬列車を阻止するぞ！」「山田弾薬庫を撤去せよ！」、シュプレヒコールが南小倉駅にこだまする。立往生した弾薬列車と、その前にすわりこんだデモ隊の横の線路を、ひっきりなしに、通勤列車や急行列車が風を巻き起こして走る。
>　この思わぬできごとに、駅員は走りまわり、プラットフォームや周囲の道路に、通勤・通学の人々が立ちどまる。駅の前の丘には、近くの住民や小学生の人垣ができる。その群衆のなかには、カメラを持ち、メモにペンを走らせる私服刑事の目が光る。」[78]

この「すわりこみ」は、炎天下で 8 時間続いた。その間の様子を写した写真は、今回取り上げた社青同福岡の巡回用展示写真には含まれていない。この 8 時間のあいだに、列車へのビラ貼りや、機関士への労働放棄の説得とその失敗の一

簡、2020 年 11 月 8 日消印。

[77] 福岡労働者反戦闘争委員会編『反戦青年労働者』（三一書房、1969 年）、11 頁。

[78] 同上、10 頁。この引用にある「立往生した弾薬列車と、その前にすわりこんだデモ隊の横の線路を、ひっきりなしに、通勤列車や急行列車が風を巻き起こして走る」という記述については、当日のすわり込みを指揮していた筑紫武彦が疑問を持っている。筑紫によれば、複数の線路上にすわり込みメンバーがおり、筑紫自身がそれら複数の線路上を始終移動し、巡回していた。山田弾薬庫への引込み線だけではなく、日豊本線の線路も列車が通過することはできなかったはずだという（筑紫建彦から市橋秀夫への書簡、2020 年 11 月 8 日消印）。

部始終など、北九反戦および社青同福岡の運動のその後にとって最も重要な出来事が起こっているが、巡回用展示写真は、機動隊が午後 3 時に到着して以降から始まっている。一連の写真は、機動隊の登場、すわりこみの排除、弾薬庫までの列車移動のあいだにデモ隊によって繰り返し行なわれたすわりこみ、という非暴力直接行動の最も劇的な光景に絞ってこの日の行動を伝えようとしている。

> 「……午後三時から機動隊による実力行使が行なわれた。反戦と学生の部隊は二隊に分かれ、一隊が排除されたら別の隊がすわりこむ戦術をくり返し、一km先の山田弾薬庫まで抵抗した。」[79]

弾薬列車が山田弾薬庫に入ったのは、夕方の 5 時頃だった。この日の行動では、北九反戦のリーダーや九大生ら 4 名と、通行を許されず警察官に「角材をもってなぐりかかった」とされるタクシー運転手 1 名の逮捕者を出した[80]。また、福岡ベ平連はこの日、ベ平連旗を機動隊に奪われていた[81]。

㊳ 1968/06/11「機動隊出動直前　スクラムを固めよ」

［すわりこんでいる者たちの後ろには報道カメラマンと思われる者たちが脚立の上に立ってカメラを手にし、列車とすわりこみ参加者が対峙している構図で出来事が起こるのを待ち構えている。］

---

[79] 日本社会主義青年同盟福岡地区支部『闘う若者』77 号、1968 年 7 月 5 日、1 頁。新聞報道では弾薬庫まで 2.4 ㎞と報道されているように、実際には 2 ㎞以上にわたってすわりこみが繰り返された（『朝日新聞』西部版、1968 年 6 月 12 日朝刊）。
[80]『朝日新聞』西部版、1968 年 6 月 12 日朝刊。
[81] 福岡ベ平連「福岡ベ平連さらに前進を　総括と報告（レジュメ）」1968/6/19、石崎昭哲史料、九州大学文書館所蔵。

㊴6 月 11 日　第一次弾薬列車阻止闘争　700 名の機動隊に守られて行く弾薬列車

㊵1968/06/11「鉄道公安機動隊」

㊶1968/06/11「退去命令拒否」

[「九大反戦」からも学生・院生が参加してすわりこんでいる。]

㊷1968/06/11「挑発」

［拡声器を耳元におしつけて告げられる退去命令。その怒声のすさまじさを捉えた一枚。まったく動じていないかのように写されているすわり込み参加者は、どんな感情で何を考えていたのだろう。］

㊹1968/06/11　6 月 11 日　弾薬輸送阻止

［手前のヘルメットには、「九大反戦委員会」「九大反戦」の文字。機動隊に引き抜かれているのは、おそらく女性の学生だと思われる。活動家ではないだろうことが、ヘルメットやヤッケを着用せず、パンプス、ジーンズ風ズボン、横縞半袖シャツというスポーティーでカジュアルな出立ちであることから推測できる。］

㊼1968/06/11「弾薬列車」

㊽1968/06/11
「座り込みを続行する反戦委　弾薬列車は機動隊によって守られながら徐行する」

㊾1968/06/11「山田弾薬庫ゲート前　弾薬列車を守る.....」

㊿1968/06/11　「反戦委と共に社会党」

［当初抗議集会を開くことだけを予定していた北九州の社会党関係者からも、すわり込む者が出た。］

3-4-2. 6 月 16 日（日）板付基地撤去闘争

米軍ジェット機墜落から 2 週間目、北九反戦、西南大や福岡教育大の三派系全学連の学生、べ平連、日中友好協会（正統）のメンバーら 300 名が、午後 1 時過ぎから福岡市役所前で抗議集会「板付基地、山田弾薬庫撤去、福岡県青年学生集会」を開催。板付空軍基地までの約 4 キロをデモ行進。午後 4 時ごろ、基地ゲート前には福岡県警発表で約 500 人が集合した [82]。6 人が逮捕され、けが人も続出した [83]。社青同福岡地本の機関誌には、この日の行動に関するまとまった記事はないが、以下のような記述がある。

> 「この北九州の闘い［＝北九反戦を中心にした山田弾薬庫撤去、弾薬輸送阻止闘争］に呼応して自らの反戦闘争をつくりだそうとしていた全県下の青年は、九大構内への米軍機墜落という事件を契機に、板付基地撤去闘争に起ち上り、六月十六日、各地区反戦青年委員会と学生約六百名は、福岡に結集し、山田弾薬庫、板付基地撤去の決起集会を持ち、板付基地への断固たる抗議デモを展開した。」[84]

社青同福岡地本が全県的に呼びかけておこなった山田弾薬庫および板付基地撤去を求める抗議行動が、6 月 16 日の板付闘争であった。

日本政府は 6 月 11 日の基地問題関係閣僚協議会で板付基地の移転、代替地選定の方針を決定、日米合同委員会での正式申し入れへと動こうとしていることが、この日の朝刊で報道されていた [85]。

⑤1968/06/16　「『ガンバレー』デモ隊列へ、紙ふぶきが舞う（福岡市中洲にて）」

［福岡市の中心的繁華街地区である中洲を通過するデモ隊。沿道の見物人から拍手を受けている。］

---

[82]『朝日新聞』西部版、1968 年 6 月 17 日朝刊。
[83] 福岡労働者反戦闘争委員会編『反戦青年労働者』三一書房、1969 年、70-71 頁。
[84]『闘う若者』no. 77, 1968 年 7 月 5 日、 1 頁。
[85]『朝日新聞』西部版、1968 年 6 月 16 日朝刊。

㊷1968/06/16　「福岡市内　板付へ」

［反戦青年委の旗手を先頭に、「革マル」や「中核」の旗を持つ学生が続いている。反戦青年委の旗には、「直鞍地区」（ちょくあんちく）の文字が見える。直鞍地区とは、福岡県筑豊の直方市、宮若市（2006 年に旧宮田町と旧若宮町が合併）、鞍手郡（鞍手町、小竹町を含む）の全体の区域の呼称。］

㊸1968/06/16　「板付ゲート前」

［板付空軍基地のゲート前に陣取る警官隊。後方には、’UNITED AIR FORCE ITAZUKE AIR BASE PACIFIC AIR FORCE’の英字看板が見える。］

㊹1968/06/16　「不当逮捕①」

㊺1968/06/16　「見よ!!　不当逮捕②」

㊻1968/06/16　「不当逮捕③」

［この橋は、古川橋。］

㊼1968/06/16　板付ゲート前　むこうが板付基地」

［ゲート前でデモをする社青同・反戦青年委部隊。旗には、「社会主義青年同盟九大班」の文字が見える。］

㊽1968/06/18　キャプション無し。

［警官隊と接するようにデモをおこなう社青同・反戦青年委のデモ隊。翌日の新聞報道には「デモ隊はゲート前で約五百人（福岡県警調べ）となり「基地撤去」を叫んで、ゲート前の古川橋を中心に仲介とデモをくり返し、数回にわたって警官隊の列と接触した」（『朝日新聞』西部版、1968 年 6 月 17 日朝刊）。］

㊾1968/06/16　「板付ゲート前」

㊿1968/06/16　「板付ゲート前」

(51)1968/06/16　「抗議のヘルメットを下に飛び立つ.....」

［櫓の上には、抗議行動を監視する私服警官が詰めている。］

(52)1968/06/16　「板付ゲート前」

［一番手前に写っているヘルメットには取材班と思われる「NHK」の文字がみえる。］

㊸1968/06/16　「機動隊デモ隊列へ突入」

㊹1968/06/16　「アイツをパクレ!!」

［五時すぎ、警官隊は実力規制でデモ隊を古川橋の上から押し返した。また橋のたもとで待機していた警官隊も前に出てデモ隊を分断しようとしたため、各所でもみ合いとなった。ここで五人が公務執行妨害で逮捕された（『朝日新聞』西部版、1968 年 6 月 17 日朝刊）。］

㊺1968/06/16「こいつをパクレッ　板付ゲート前」

㊼1968/06/16
「6.16 板付基地撤去斗争」

㊽1968/06/16
「これが機動隊!!　板付ゲート前」

㊾1968/06/16　「抗議する少年　16 才の少年がこの日逮捕された」

［新聞では、警官隊とデモ隊のもみ合いの際に「投石した少年（一五）一人も補導された」（『朝日新聞』西部版、1968 年 6 月 17 日朝刊）との報道がある。］

3-4. 第三次弾薬輸送阻止闘争　7 月 17 日～21 日

5 月下旬に全港湾関門支部のエクスマウス号荷役拒否にあい、広島県の江田島にある秋月弾薬庫に荷揚地を変更していた米軍は、7 月 1 日、その弾薬を当初の搬入目的地であった山田弾薬庫に輸送する作業に取りかかった。秋月弾薬庫から弾薬を積んだハシケがタグボートに引かれ、14 キロ先の呉市広町にある広弾薬庫への移送が始まったのである[86]。7 月 15 日になって、広弾薬庫から引き込み線を経由、国鉄広駅を起点にする国鉄の貨車で翌 16 日より 1 週間かけて約千トンを運ばれると正式発表された[87]。初日の 7 月 16 日には約 120 トンを重量の貨車で運び、南小倉駅には翌 17 日の午前 7 時すぎに到着する予定だった[88]。

この発表を受けた北九反戦は、第三次の、そして最後となった弾薬輸送阻止闘争を計画した。以下は、社青同福岡の機関紙『闘う若者』掲載の報告である。

> 「七月十七日、早朝、機動隊と公安機動隊千五百名の弾圧体制のなかで、各地区反戦の部隊二百名は、弾薬列車の前にすわりこんだ。反戦の第一次、第二次阻止闘争は、総評二百名が反戦の後に続いてすわりこむという情勢をつくりあげていた。反戦は引きぬかれてもまたうしろにさがってすわりこんだ。途中から山田［地区の地域居住住民］の婦人三名も参加した。反戦部隊から七名、総評部隊から一名が逮捕された。そのあと住民に対してカンパ。」[89]

続く 18 日には「山田弾薬庫撤去住民会議」の世話人会がもたれ、結成へ進んだとの記述があるが、その後の展開については不明である。

---

[86]『朝日新聞』東京版、1968 年 7 月 1 日夕刊。
[87]『朝日新聞』東京版、1968 年 7 月 16 日朝刊。
[88]『朝日新聞』西日本版、1968 年 7 月 16 日夕刊。
[89] 日本社会主義青年同盟福岡地区支部『闘う若者』78 号、1968 年 9 月 20 日、2 頁。

以下にみるように、巡回用展示写真は 7 月 21 日の闘争を撮影したものであるが、この日は弾薬列車の運行はなかった。行なわれたのは、闘争全体を総括する意味を持つ県評主催の「山田弾薬庫撤去、輸送阻止大集会」（南小倉中央公園）への参加だった。機関紙には「二十一日には、県評主催の南小倉大集会がもたれ、千五百名が参加。山田弾薬庫までデモをした」[90]と報告されている。

74～76の写真は、ゲート内に突入して連れ出された中核派を撮影したものだと思われるが、社青同福岡の機関紙『闘う若者』は「中核派は山田ゲート内突入という無謀な行動に出て十名が逮捕される」とこの件についてふれているが、3 枚の写真からは撮影者の共感あるいは同情のまなざしを感じ取ることもできなくないだろう。

北九反戦および社青同福岡は、この 21 日の夜、非暴力実力闘争による弾薬輸送阻止闘争の終了を確認する。

> 「その夜、同盟は、反戦委を中心につくりあげていったこの闘争は、二十一日の大集会までが限界で、反戦、学生以外の部隊の参加は二十二日は望めないこと。大集会まで行なわせた反戦の闘いの意義と、県評部隊を一回しか共に実力阻止行動に参加させ得なかった反戦の闘いの力量の限界を確認して、弾薬輸送最終日の二十二日は実力阻止を行なわず、抗議のデモに切りかえることを確認、二十二日、実力阻止をして全員逮捕されることは、反戦の力量の限界を再生産することにすぎないからだ。県評の闘いは二十一日ですべて終っていた。反戦は再び孤立していた。」[91]

続く 22 日の様子は次のように述べられている。

> 「二十二日、反戦の部隊は弾薬列車の前を．ジグザグデモをし、そのまま、線路の横の道を弾薬列車と共に走っていた。最後の抗議である。ところが、そのデモを機動隊はとりかこみ、散々やじり「横着な奴がこの中にいる」といって、三人を逮捕。同じく別に抗議行動をしていたべ平連、革マルから四名を逮捕した。」[92]

5 月から 7 月までの 3 か月、弾薬輸送阻止の非暴力実力闘争で、反戦青年委はのべ 31 名の逮捕者、のべ 12 名の起訴者、3 名の休職者を出したという。起訴者の法廷闘争費用として、百万円を社青同同盟員自身で集めることも決められた[93]。

---

[90] 日本社会主義青年同盟福岡地区支部『闘う若者』78 号、1968 年 9 月 20 日、2 頁。
[91] 同上。
[92] 同上。
[93] 同上。

⑩ 1968/07/21「山田弾薬庫撤去要求県集会」

⑪ 1968/07/21
「県集会で訴える反戦委」

⑫ 1968/07/21　「反戦委の行動と問題提起は、県集会へ.....」

⑬ 1968/07/21　「山田、板付基地撤去、築城移転反対!!　福岡県集会」

⑭ 1968/07/21　キャプション無し

⑮1968/07/21「『この野郎、さっさと歩け』
山田弾薬庫ゲート内で」

⑯ 1968/07/21　キャプション無し

⑱1968/07/21「山田弾薬庫撤去、弾薬輸送阻止!!　断呼―福岡県下の青年労働者―」

4. 山田弾薬庫のその後

本節では、山田弾薬庫が日本に返還されていった経緯について事実経過だけをかいつまんで記す。

1968 年 6 月 2 日の九州大学への米軍ファントムジェット機墜落後、アメリカ合衆国は在日米軍基地の再編を急いだことが分っている [94]。1968 年 6 月 11 日の山田弾薬庫への弾薬輸送阻止闘争がそれに続き、在福岡米国領事館はさらに危惧を募らせていたとされる [95]。

68 年 6 月 20 日には、日米合同委員会で、板付基地移転に努力し、基地の運用も慎重にするなどの決定がなされた [96]。一年後の 69 年 6 月 25 日には、持回り日米合同委員会で、板付など 5 基地の一部返還や、自衛隊、運輸省の共同使用などが決定され、板付基地は全体の 1/4 が返還予定と報道された [97]。

山田弾薬庫についても、米軍は 1969 年 10 月 7 日、機能縮小を発表したが、弾薬庫そのものの縮小や返還はなかった [98]。機能縮小に伴い、11 月 26 日から 13 日間にわたり、山田弾薬庫から横田基地、三沢基地、韓国の釜山へと弾薬移送がはじまり、12 月 8 日に最終便が横田に入った [99]。

1970 年 5 月には横田、沖縄、三沢などへの最後となった弾薬移送がはじまり、6 月 5 日には山田弾薬庫には弾薬が残されていないことが福岡県渉外労務管理事務所の立ち入り検査で確認された。米軍は 1970 年 10 月 15 日に正式に山田弾薬庫の閉鎖を発表した。最終的に山田弾薬庫が日本に返還されたのは、1972 年 2 月 15 日である [100]。米軍による門司港の接収が全面解除されたのも、1972 年のことである [101]。

大蔵省からの払い下げをめぐって防衛庁が介入したため、北九州市への全面返還はかなわなかった。また、1981 年 5 月には、山田弾薬庫が核弾頭を貯蔵していた疑いが持ち上がって国会で楢崎弥之助衆議院議員（社会党）が政府を追及した。すでにふれたが、現在は、一部は陸上自衛隊山田訓練所となり、そ

---

94 この点については、折田悦郎・藤岡健太郎・柳町茂一・川本光治・官田光史・中村江里編『「九大紛争」資料集——年表・米国国立公文書館所蔵資料等』九州大学文書館、2016 年に所収された、在東京米国大使館から国務省に宛てられた各種国務省電報史料（日本語に訳出）や、川名晋史『基地の消長 1968-1973——日本本土の米軍基地「撤退」政策』勁草書房、2020 年、特に 2〜3 章を参照のこと。

95 川名晋史『基地の消長 1968-1973——日本本土の米軍基地「撤退」政策』勁草書房、2020 年、68 頁。

96『朝日新聞』東京版、1968 年 6 月 21 日朝刊。

97『朝日新聞』東京版、1969 年 6 月 26 日朝刊。

98『読売新聞』東京版、1969 年 10 月 7 日夕刊。

99『朝日新聞』東京版 11 月 26 日夕刊; 東京版 11 月 28 日夕刊; 西部版 1969 年 12 月 6 日夕刊; 東京版、1969 年 12 月 8 日夕刊。

100 この段落の山田弾薬庫の閉鎖および 1980 年代初頭までの返還過程については、北九州市史編さん委員会編『北九州市史　五市合併以後』北九州市、1983 年、965-72 頁を参照した。

101 神崎智子「門司港の『女沖仲士』の歴史」、林えいだい『女沖仲士たち』新評論、2018 年、170 頁。

の他は「山田緑地」公園として整備され市民に開放されている。

5. 運動史研究と写真史料

日本におけるベトナム反戦運動では、署名活動、集会の開催、街頭デモ、在日米軍基地や施設の撤去運動、在日米軍米兵へのカウンセリング活動や脱走を含む不服従の呼びかけなど、さまざまなかたちの抗議行動が各地で展開された。ベトナム反戦運動といえば、学生による各セクト組織や全共闘の運動、市民によるベ平連運動、青年労働者を主体とした反戦青年委員会運動の三つの大きな潮流があったとされるが、この三者の中でも、青年労働者の反戦運動についての研究は最も取組みが少ない状況にある。本稿は、ベ平連および学生運動と連携しながらも、北九州でのベトナム反戦運動を牽引した北九州反戦青年委員会の運動について、記録写真というヴィジュアル史料を手がかりにして紹介・解説した。

本稿冒頭でふれたように、掲載した記録写真は巡回展示用に作成されたものに限られているが、実際は本稿掲載以外の写真も多数現存している。山田弾薬庫のすわり込み闘争の写真は 400 枚以上、板付闘争についてはカラー写真も含め約 240 枚が残されている。それらの写真には、警察や機動隊など当局との対峙場面のようなニュース性やドラマ性の高い図像に限らない、闘争現場に流れる多様な時間と光景が記録された写真も含まれている。たとえば、巡回展示用には選択されず、本稿では未掲載となっている弾薬列車阻止闘争の写真群には、次のような写真が含まれている――なかなかやって来ない機動隊を待ちくたびれてしまっている参加者（中には線路上に寝ころんでしまっている参加者もいる）、報道陣からインタビューを受けている若い女性の参加者、止めた機関車の車両に抗議ビラを次々に張り付ける参加者の作業光景、機関車の運転手らと話を交わしている（運行停止を呼びかけていると思われる）すわり込み参加者たち。それらは「技巧を凝らしたりしないカメラ」で撮られた「親密な肖像画」であり、非暴力直接行動が持つある種の張り詰めたイメージとは大いに異なる[102]。

また、本稿掲載の記録写真は、北九反戦の非暴力直接行動に焦点が当てられたものであり、角材を持った行動が取られなかったことが明瞭に示されている。しかし、すわり込みやデモをおこなうなどの直接行動を伴わない運動／活動についての記録は、ここには含まれてはいない。地域住民への働きかけや地域住民からの支援がなされたことの記載が社青同福岡の機関誌『闘う若者』には残されているが、そのような場面は写真の記録としては見当たらないのである。カンパ活動などや会議の様子を写した写真も見当たらない。北九反戦のメンバーたちは、それぞれの労働現場での活動に従事し、異なる職場の仲間の闘争支援にかけつけて運動を支えていたが、本稿掲載の記録写真からはそうした日常的な活動は見えてこない。

---

[102] ここでの引用は、歴史史料としてのヴィクトリア時代の写真について論じたラファエル・サミュエルの論考中に出てくる’candid camera and intimate portraits’に示唆を得て借用したものである。R. Samuel, ‘The Eye of History’, in his *Theatres of Memory: Past and Present in Contemporary Culture*, London: Verso, 2012 (revised paperback edition), p. 318.

女性の参加者の写真が、展示巡回用写真にはほとんど含まれていないことも指摘しておきたい。人数的には少ないのだが、弾薬列車のすわり込みにも女性メンバーの参加があった。男性労働者とともにすわり込んで腕を固く組み、機動隊によるゴボウ抜きに抵抗している女性労働者の写真（本稿未掲載）も残されている。また、北九反戦のメンバーではなく、弾薬輸送阻止のベトナム反戦運動で有機的な連携関係にあったわけでもないので巡回用記録写真に含まれていないのはある意味で当然なのであるが、弾薬荷役拒否闘争に参加して衣笠岸壁ですわり込んでいる全港湾関門支部の沿岸荷役を担った女性労働者が数多く写っている闘争写真もある。

つまり、写真などのヴィジュアル史料は文字史料以上に過去の出来事が限定的・選択的に残されている可能性があり、写真を一次史料として使用しようとする者は、写真として選択されなかった「見えない過去」の範囲、文脈についても注意を十分に払う必要がある。

社会学者吉見俊哉が、東京のべ平連活動の中心にもいた鶴見良行に関する論考のなかで、写真の読解についてのより精緻な視座を提供している。吉見の論考[103]に依拠しつつ、さらにイギリスの社会史家ラファエル・サミュエルの論考にもふれつつ、写真というヴィジュアル史料が持つ独自の意味や意義についてもう少し考えてみたい。

吉見が引用するところの多木浩二は、写真というものが、写真家という主体の意識や思想を表現したものとする考え方や、出来事の記録という情報的価値を持つものという考え方を批判し、視覚の「確からしさ」を疑い、写真はそれを撮影する主体の道具でも、環境を対象として切り取りうるものでもなく、「写真の方法そのものの源泉が環境の思想のなかにある」[104]と述べている。そして、写真に写されている／写っている「環境とは単に外部の世界ではなく、『こちら』（主体）から『むこう』（外部）に見えるものとして完全に対象化してしまうことも、視覚化してしまうこともできぬものであり、写真はこのまじわりのなかかからうみだされ、再び環境へ意味の記号として内挿されていくものとなる」[105]と述べる。

吉見は、上述のような多木の写真論に先行して類似の指摘を行なっていた人物として鶴見良行を取り上げ、高く評価しているのである[106]。鶴見が生涯にわたって調査道具としてカメラを持ち歩いて多数の写真撮影をみずから行なっていたことはよく知られている。1958 年という早い段階で、鶴見良行は次のように述べていた。

> 「……重要なことは写真は実感の表現であると同時にその実感を超えて存在しうる別の意味をもとらえているのだ。肉眼でとらえられたイメージが現実の素材から選択されて成立したものであるのとはちがって、機

---

[103] 吉見俊哉『アメリカの越え方――和子・俊輔・良行の抵抗と越境』弘文堂、2012 年。

[104] 多木浩二「眼と眼ならざるもの」、同著『写真論集成』岩波書店、2003 年、32 頁。

[105] 同上、39 頁。

[106] 吉見俊哉『アメリカの越え方――和子・俊輔・良行の抵抗と越境』弘文堂、2012 年、158-59 頁。

械によってとらえられた現実は肉眼の選択によって落とされた部分をも含んでしまうからである」[107]

多木浩二による「『見た』ものはたえず浸透してくる『見えないもの』に浸透されている」[108]とか、「見える世界と見えない世界とが相互に浸透して織りあげるわれわれ自身の活動の神経組織をきわだたせるものなのである」[109]という指摘と、鶴見良行の上記の指摘とでは、内容が大きく異なる面があるものの、運動という出来事に閉域しがちな記録写真の読解とは異なる立場を、多木も鶴見も打ち出していることに変わりはない。

本稿で紹介してきた記録写真が、北九反戦のメンバーが実行した直接行動を記録したものであり、起こった出来事の「記録」としての「情報的価値」を持つものであることを否定する必要はないだろう。一方で、実証という習い性でもって写真に相対しがちな私たち歴史研究学徒は、「『記録性』に対する幼稚な幻想」や「写真は事態を記録する装置だという信仰」といった多木浩二がその写真論で指摘する陥穽に陥りやすいことも否定できない。近年少なからず刊行されている 1960 年代学生運動の写真集についても、その「記録性」、すなわち「なにが写っているか」に依存する以上の取り上げ方がされているようにはみえないという憾みがある。

しかし、一方で、イギリスの社会史家でヒストリー・ワークショップ運動の中心的存在だったラファエル・サミュエルは、私たちが写真に象徴性や偶像性（‘iconic’）を強く求めてしまうという問題があることを指摘している。

「理想的には、それ［写真］は透明であるべきであり、真実の客観的相関物であるべきなのである。我々には、秘密を保持している写真はほとんど我慢がならない。つまり、写真を使用することの要は、歴史を「あったままに」示すことにある。解釈とは最後まで残された細部を明るみに出すための精読の問題であり、抑圧されているナラティヴを同定するといった問題ではない。理想的には、写真とは、うまく選ばれたものならば、口述証言や、さらに言えば、文書館の史料のように、自ら語るものでなくてはならないのである。」[110]

サミュエルは続けて、こうした私たちの写真に対する態度は、写されている過去についての知識を求めて写真に向かっているように見えて、実はそうではなく、私たちが持ち込む私たちの現在の知識こそが過去の写真を意味づけてしまうのであり、それは、多かれ少なかれひとつの過去の偶然の痕跡にすぎないものを高貴なる偶像（‘a precious icon’）へと変えてしまうリスクがあると、鋭く指摘している。

この指摘は、記録としての表象との対比で視覚的表象としての写真の読解の意義を主張する多木浩二とは異なり、時代の文脈に埋め込まれた記録の読解を

---

107 鶴見良行『鶴見良行著作集 1　出発』みすず書房、1999 年、98 頁。
108 多木浩二「眼と眼ならざるもの」、同著『写真論集成』岩波書店、2003 年、39 頁
109 同上、33 頁。
110 R. Samuel, ‘The Eye of History’, in his *Theatres of Memory: Past and Present in Contemporary Culture*, London: Verso, 2012 (revised paperback edition), p. 328.

求めながら実は視覚的表象の力の読解を行なってしまうことを、歴史研究という立場からリスクとして指摘したものである[111]。

北九反戦の写真から実際に起きていた出来事を読み取ることは重要であり、本稿でもそういう点に着目して紹介してきた。しかし、私たちには、運動史の補強のための読解や、直接行動のピークだけにイメージを収斂させ固化させてしまうような読解に留まることを越えること、そして同時に、象徴化や偶像化の誘いから距離を置くことが求められている。ひとつの歴史的痕跡として、より広い社会の文脈に位置付けていくような読解に、また、それらの多様な解釈を封じ込めないような再読解に、くり返し挑戦することが求められているのだろう。

撮影者が「見た」もののなかにも、運動そのものではなく運動をとりまく外部や状況に焦点を当てたものがあるし、運動の記録を意識して撮影された多くの写真にも、鶴見の言うように「肉眼の選択によって落とされた部分」がいやおうなく含まれている。一枚だけ取り出してみた場合と、一連の多数の写真をつながりある組み写真としてみた場合では、同じ写真から読み取りうることも異なってくる。写真に記録された「運動」とその「運動の外部」と言いうるものとの交差に着目して検討を繰り返すなかで、運動の文脈、すなわち時代というもののつかみにくい特色に迫りたいものである。

＊本稿では敬称はすべて省略させていただいた。史料の提供やインタビューに応じてくださり、つたない質問にも引き続きご教示いただいた社青同福岡、北九反戦のみなさんに、とりわけ織田晋平、木村敏彦、筑紫建彦の各氏に、お礼申し上げます。

[111] 視覚的表象の力について論じた Raphael Samuel, ‘Scopophilia’, in his *Theatres of Memory: Past and Present in Contemporary Culture*, London: Verso, 2012 (revised paperback edition), pp. 364-77 を参照のこと。この点に関連して、ジャック・ランシエールの「物思いにふけるイメージ」、同『解放された観客』法政大学出版局、2018 年新装版所収、が参考になる。ランシエールは、ロラン・バルトによる「プンクゥトム」と「ストゥディウム」の古典的区別の困難を論じ、「再現＝表象の複数の様式の間にある緊張関係」や「未規定性」などの言い方で写真の「物思いにふける」機能を指摘し、写真などのイメージが持つ作用・機能の一元的理解への傾きを批判している。

Documentary Photographs and Anti-Vietnam War in Japan:
The Kitakyusyu Anti-Vietnam War Youth Committee and Its Direct Action to Stop the Transportation of U.S. Ammunition Supply

Hideo ICHIHASHI

This article introduces documentary photographs taken in 1968 by the Fukuoka Area Headquarters of the Socialist Youth League, a youth movement organization of the "young worker" in Fukuoka. Before examining the photos, the article describes the time and geographical context in which the photos were taken. In the final section, some comments will be made on the meaning of documentary photographs, problems in interpretation, and the significance of visual materials, for writing social/labor movement history.

The main theme of the photographs introduced here was the nonviolent direct action against the Vietnam War in 1968 conducted by the Kitakyushu Anti-Vietnam War Youth Committee, which was formed mainly by the individual members of Shaseido Fukuoka (Fukuoka Area Division of the Socialist Youth League) who live in the Kitakyushu City area. The main action was to prevent the transport of ammunition to the U.S. Yamada Ammunition Depot, located in the middle of Kitakyushu City. However, the photographs also recorded the worker's "struggle against rationalization" at the Kitakyushu City Council and the struggle for the removal of Itazuke U.S. Air Base immediately after the crash of the RF-4C phantom jet reconnaissance plane to a building under construction at Kyushu University. The latter accident had a significant impact on the U.S. military base realignment policy in the Far East.

In the study of the history of the anti-Vietnam war movement in Japan, there has been a considerable accumulation of research on the activities of "Beheiren" movement as well as student movements. However, there is almost no academic research on the anti-Vietnam war movement carried out by the Anti-Vietnam War Youth Committee, in which many young workers participated across the country. Besides, there has been no work to reconsider the uniform image attached to them: "extremists" who was wearing a helmet and swinging a square timber alongside of the "violent" student activists.

The case study in this paper reveals that the anti-Vietnam movement in Kitakyushu, which was highlighted by the anti-Vietnam movement to stop the transportation of ammunition by the U.S. military, was a unique nonviolent direct action initiated by the local Anti-Vietnam War Youth Committee, a group of individual young workers of men and women in their teens and twenties. It indicates that the study of the history of the anti-Vietnam war movement in Japan requires the accumulation of local case studies, with an eye for multidimensional analysis of the actors involved in the movement.

Keywords: Vietnam Anti-war Movement, 1968, Kitakyushu Anti-War Youth Committee, Fukuoka Area Division of the Socialist Youth League (Shaseido Fukuoka), U.S. Yamada Ammunition Depot, U.S. Army Base.